

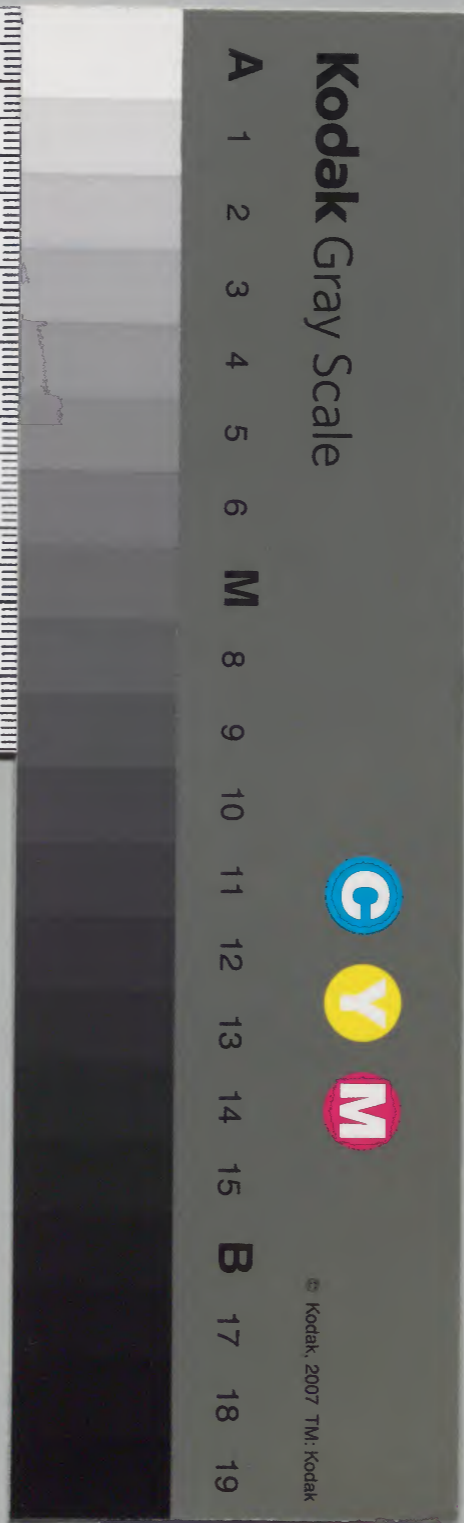
二部

地

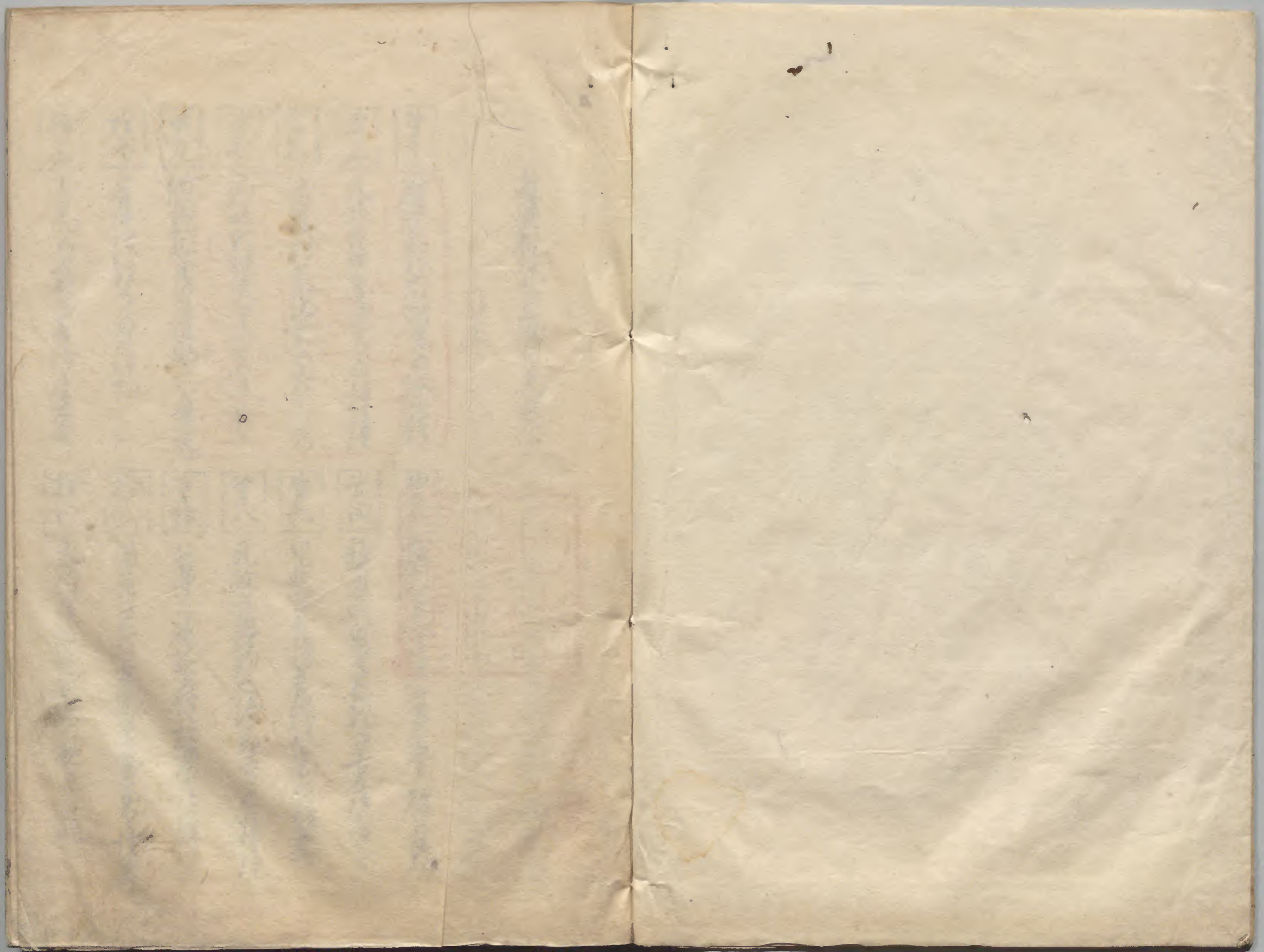
和書門		二八四二二	類
一五冊	一四架	一八四二二	函號

內閣文庫		和書
二八四二二	一五冊	類
一七四架	一八四二二	函號

內閣文庫	
番號	和 28422
冊數	15 ( 5 )
函號	17? 1168









遊歴雜記編目卷之十

目派

才一

府中の沢六郎官の墓

才二

元政の路名通史の持隆

才三

沈徳村天満宮のたけら

才四

約辺に徳をのみ

才五

酒城後角男道助の墳墓

才六

公津法恒寺の法物

才七

小日向の遊鷹若仁の墳墓

才八

武蔵外野の事實碑の跡

才九

龍河と鬼子母神の古塔

才十

甲斐の少将吉保の墓

才十一

元政の路約邊津の寺の持隆

才十二

公津法恒寺の法物

才十三

法草寺の光感寺の玉葉の墳墓

才十四

氷川の神神の地



明治十二年購



拾五 菅仲領主の秘密御行  
拾六 秋遊嶽雲の春長の碑

拾七 箕橋町おん助七の横巻  
拾八 箕橋後向の北花山お家の古碑

拾九 浅草富士とんざんの例券  
二十拾 浅草寺中住持おきらの横巻

古一 浅草深田仲知の古横  
古二 板倉伊智の古券の古横

古二 深田お舟入道お佛の碑  
古三 指折の社の法法大師の古碑

古三 今丸の社のお乾付の碑  
古四 観成院内多官お舟の横巻

古七 湯島の屋敷お舟の横  
古八 宝篋首法池の古水柳の井

古九 浅草寺お舟の横巻  
古九 法福寺中住持お虎女の古碑

古一 月島千代が法林泉の道遠  
古二 小月島入道お舟の比賣の横

古三 矢野村お舟大明神再遊  
古四 大原河内将平同士の古碑

古五 羽根田お舟お舟の再遊  
古六 赤川の沢海禅寺の千枝荒木の像

古七 お舟お舟お舟の御巻  
古八 牛島村河内お舟の御巻

古九 舟お舟お舟の御巻  
古拾 徳島お舟お舟の御巻

古拾一 浅草寺のお舟の御巻  
古二 福島お舟お舟の御巻

古二 舟お舟お舟の御巻  
古三 千住お舟お舟の御巻

古三 浅草寺お舟お舟の御巻  
古四 山田お舟お舟の御巻

古七 浅草寺お舟お舟の御巻  
古八 樹木お舟お舟の御巻

古九 浅草寺お舟お舟の御巻  
古拾 市川お舟お舟の御巻



- 五十一 修木玄庵文山兄弟の墳墓
- 五十二 聖教切通寺中波多徳の古墳
- 五十三 薩列の藩中八木八郎の墓
- 五十四 寺移りの同山、光院求向堂の古墳
- 五十五 誠言の沢塩屋を懐懐の墓
- 五十六 岩根の風土城月天寺の墓
- 五十七 皇立寺村留山の古墳
- 五十八 河川六方坊世蓮殿の古墳
- 五十九 河川六方坊要原の中付塚
- 六十 河川六方坊能道殿十堂の古墳
- 六十一 河川河川の中世蓮殿の古墳
- 六十二 押付村の墓、日蓮社、漫筆
- 六十三 押付村春安寺、高天宮
- 六十四 泊込湯市の中頭八郎の古墳
- 六十五 河川中中行目、助の墓
- 六十六 青山青源寺の中志保、安の墓
- 六十七 河川北初院中画堂の墓
- 六十八 新宮誠系寺の中鬼坊主の古墳

- 六十九 常市二宮七面神の中
- 七十 常市長運寺の中、虎の古墳
- 七十一 箕の福童を中、及音塚
- 七十二 芝泉岳寺の中、法華寺、義厚の墓
- 七十三 不知松原、石庫の妖怪
- 七十四 赤川清光寺、杜の再遊
- 七十五 上平井の眺、田の宮遊
- 七十六 赤成寺、笹守、桃寺の始元
- 七十七 感徳寺、中山、堂の墓
- 七十八 田中、清光、赤成、室の目録

以上



遊歴記記編自卷之下

中

在武蔵原山宿所廊公迄十方庵大津新教順宗初光祐也

一武蔵多摩郡府中の沢沼社に前大津新、江戸の南側津宿あり此社

初編年九の條、小社あり、セイカホ、サイレイ、コメキツ、ギシキ

又、ミコフ、ナウ、ジレシ、ヲロリ、タイサン、シシジ、サイ

より、サハク、ジヨ、ヤシロ、コト、シシラ、トリウケ

社が、イヌ、コウ、ミコシ、シシコウ

夜成の刻、モチロレ、ヨコテラ、ヂクチ、ケレ、カド、ハナ

の、イヌ、コウ、ミコシ、シシコウ















トリイ

カコリウラクホイロ ミカミブゲク

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア

カニラノイロ カイテア















ヤド カシ ヨー イトヤス ツ

おと信じてとちひしが源をトクからぬまじし事かき書かすその

今物も信じて一六新血の様を思ふありかたのありきつーと

ありきバカトしからるる産婦の様は何ぞと婦らん我故も此落

まむと信じて一六新血の様を思ふありかたのありきつーと

物を信じてあつた事かき書かすその

今物も信じて一六新血の様を思ふありかたのありきつーと

物を信じてあつた事かき書かすその

今物も信じて一六新血の様を思ふありかたのありきつーと

物を信じてあつた事かき書かすその

今物も信じて一六新血の様を思ふありかたのありきつーと

物を信じてあつた事かき書かすその

今物も信じて一六新血の様を思ふありかたのありきつーと

物を信じてあつた事かき書かすその

今物も信じて一六新血の様を思ふありかたのありきつーと

物を信じてあつた事かき書かすその

今物も信じて一六新血の様を思ふありかたのありきつーと

物を信じてあつた事かき書かすその

今物も信じて一六新血の様を思ふありかたのありきつーと

物を信じてあつた事かき書かすその

今物も信じて一六新血の様を思ふありかたのありきつーと

物を信じてあつた事かき書かすその

今物も信じて一六新血の様を思ふありかたのありきつーと

物を信じてあつた事かき書かすその

今物も信じて一六新血の様を思ふありかたのありきつーと































武藏國分寺

石造

石造

武藏國分寺碑記

Blank area for the inscription text, marked with vertical dashed lines.

武藏國府中國分寺碑記

在昔 聖武之朝。崇信釋教。下詔天下。每

國肇造僧尼二寺。一曰金光明四天王護國之寺。僧員二十人。一曰法華滅罪之寺。尼員十人。總稱國分寺。各有封田。國司歲收其租。資給養之。僧尼之員。有闕隨而補之。凡國有水旱之變。禱請救之。朝夕掌香火之事。誦讀仁王最勝王等經。彌裁兵遠。旱疾。祈國家福祥。歷朝因循。不改其制。史籍有徵焉。爾來千有餘載。陵谷變遷。諸國存其跡者。十無二三。先王郡縣之制。每



有詔令大政官符。下諸國司。國司兼而宣  
布之。國司所治。古稱國府。諸國徃徃至今。今  
猶有稱府中者。國分諸寺。縣官所置。壹受  
國司節制。故寺跡存于今者。多在其國府  
中之界云。武藏國多麻郡府中國分寺。相  
傳護國之寺。而滅罪之寺。今既不識其處。  
府中東距江戸城八十餘里。境壤所至。蓋  
歷世詞人所賞詠。撫率支野之地也。丙子  
之春。余遊府中。主僧盛公曰。吾護國精舍

當法運之隆。堂觀壯麗。寔巍然一大刹也。  
成壤有時。元弘之亂。一旦焚蕩。新田氏再  
造之。功雖成。兵革之世。終不復古。尋復消  
沈荒涼。四百餘載。於茲近募衆緣。新營。整  
王閣。安所傳瑞像。以表靈跡。興復之任。某  
不敢當。抑夙志。不可以已也。余歷訪舊址。  
想見徃昔。壯麗遂陟。彼高岡。觀望所謂武  
藏大野。方八百餘里者。顧謂盛公曰。上人  
勉之哉。斯野之廣。莫前世奧羽之道所經。



草莽際天。日月出入其間。虎狼從後。盜賊  
邀前行旅。白日莫不警戒。畏懼方今。四海  
朝東。鯨波不揚。率土之內。戶口殷實。民力  
普存。無地不墾。無田不播。自古草莽廣莫。  
稱隴津支野之地。今盡為良田。數千萬頃。  
東偏數十里。犬牙緣界。半為文王之囿。邑  
落相比。雞狗之聲。聞于彼此。大道如砥。東  
通都城。往來絡繹。雖復先王盛世。不踰  
今日。至理國分。精舍本為護國。立之故當

法運與國運。汚隆當此。至理隆興之世。復  
之往昔。壯麗者不足為難。上人勉之哉。銘  
曰。

帝捧惠日光。被宇宙。渙汗其命。金玉其構。  
法鼓四響。並軌靈鷲。百六有數。劫火為寇。  
威力若也。壞空不救。千祀寥邈。草木鬱茂。  
茫茫曠野。豺狼夜吼。紆苑淪沒。樵蘇回首。  
至誠必應。願言復舊。於戲諸佛。降我靈祐。  
寶曆丙子春三月。攝津服雄撰。東都河保。







魅之主制彼撓亂護持世界圓通之舉其  
 意在茲任持僧某今於人乞銘於余因以  
 十二獸弁之句勒為十二韻贈焉客曰雖  
 然如其似遊戲何余曰諸佛菩薩為群類  
 示種種身現種種土設種種法以至吹螺  
 擊鼓鳴鐘悉是莫不遊戲故曰遊諸世間  
 如幻師如兒戲余亦竊學之人也會作此  
 銘又遊戲翰墨為佛事其為似遊戲也亦  
 宜ヘナリ

銘曰

鼠山流光人未驚。牛王出世振梵聲。虎狼  
 野干氣縱橫。兔角方便誘羣情。龍宮高處  
 擊華鯨。蛇室睡破覺心生。馬腹忽變聖胎  
 成。羊鹿牛車休復轟。猿啼霜降月色清。雞  
 人未唱客先行。狗不夜吠王舍城。猪觸金  
 山轉崢嶸。矣

とあり右抄の字は十二支と金と持持の法意の才一より事と  
 あり他をねりて又面々作序余大集傳に引く五夜十二獸



シヤク ノー カニ ヨロトコヤ ナアミヨ ーゲ  
の目録と出ハ實も接あり申おとハ因小市ニまよと無解と一史  
カニシラケラ ツクサ ダイハツドラ ダイシラケラ クロコ ミヨケラシ  
大集煙ハハ貝小ハハ大方等大集煙とて二十卷あり伴初巻より

ニ松巻目録と大方等大集煙といハ又二十巻より四松巻目録  
ダイハツドラ ダイシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より五平巻と云ハ大方等

大集煙目録といハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ

大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ  
ハシラケラ セウ  
大方等大集煙目録と云ハ又二十巻より全巻目録と云ハ



と柳の葉をさしし事と大集傳に流るる 廿二支の歌たふす

當年八何の年をさし何系 標深きくさくその年の世田は源後の

後かと言は又日青く日青く時刻と代りて一切の魔事を流

休しきくの花を流す流す事とるるをさしきく大集傳に

拾遺の字がらふ十二支の文をさしきく六付申の流の声より

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

さしきく此因ふりん彼流す事とるる八將流す事とるる此流す代の

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

流すこと味あふ事とるるをさしきく流す流す十二支の歌たふす

廿二



かに

トウブ シヨ ゲンサイ ケミ  
おまの肉ニ交り現を尻下ふりて園をこ

一 武列を破却難目々村鬼子母汁の一件は上と画ふれが書漢

車のおまバ又かびりて投り此鬼子母の社の右に外橋の根押れ

と京古流も此投かき下りてを横切りて寸壁戸守あり一筆を流

風吹きもまじく彩又流を流し月日多欠ふりてかきこ

おまのひり

一 ころの枝は流無りて白指子のまき帽子をいりておまの

おまの指をかきおまの指あり刺し流春發夕を中村屋十所自

おまの指をかきおまの指あり

おまの指をかきおまの指あり

右意流もまじりておまの指をかきおまの指あり

おまの指をかきおまの指あり

一回おまの指をかきおまの指あり

おまの指をかきおまの指あり

おまの指をかきおまの指あり

おまの指をかきおまの指あり

おまの指をかきおまの指あり

おまの指をかきおまの指あり







一 同知小鬼子母弟の号と宗居く号し小夜を鬼へる指と号す  
エマ ケマフウ サイシキ バナハダ ソアク ランキ タテマヨフ ヨコハバ  
陰るあり画風彩々しく甚廉為少くも大を望ん凡余余横海  
凡五尺七寸五分

寛永元申九月 願主岡本氏

治了文化十二年申九月九日申あつたふりか古願のたつて  
エマ ワツカ ブロクシエ ノス コガク ルイソコバク

おもむくも穿小いし海ありは借小五尺七寸五分を載すの  
ワツカ ブルクテ サギダイメラジン シンゴク

一回修内小創の板下は右宗居大月神とすあり神号のあつた  
タチゴリ グズ ハワソウ シエゴ ジン ドラモリ

一 宗居号とあり神号小夜神のち後神ありし女を宗居あり  
キシ ホジレ ジツテヒツジヨ ナニシジヨ

神小鬼と母弟の十段割女の月才九番目の何班女と号す

鬼女と号すあり 本法に記列諸神といふる如くありしを宗居あり  
キシヨ マツ ホンシヤ キシウ サギウラ  
て修明神と号すありしを神号とすありしを神号とすありしを  
キシ アガ ハウフウカロ ヲワレコシ キノト  
ら高麗の戦と号すありしを神号とすありしを神号とすありしを  
サカ ヤクソラゴト ナレデ ホウソウ イカテ キゼレ  
宗居の湯とありしを神号とすありしを神号とすありしを神号とすありしを  
カノ エチビシ エ ヲトシゲ マゴチヤクシトシ  
彼日と号すありしを神号とすありしを神号とすありしを神号とすありしを  
シエ ゴジシシ ヲコシエ ヲコソフシ  
ち後神ありしを神号とすありしを神号とすありしを神号とすありしを  
エキ レウナ メシアケ シヤタン ハキヤク カシ  
ありしを神号とすありしを神号とすありしを神号とすありしを神号とすありしを  
モロトモ ヨイハナ ランメイ トウブ コマゴシ ヲナヤナラテ ローセウジ  
諸大と号すありしを神号とすありしを神号とすありしを神号とすありしを  
イソウラフ ナサケ ヤマ クスリ イ  
小夜と号すありしを神号とすありしを神号とすありしを神号とすありしを















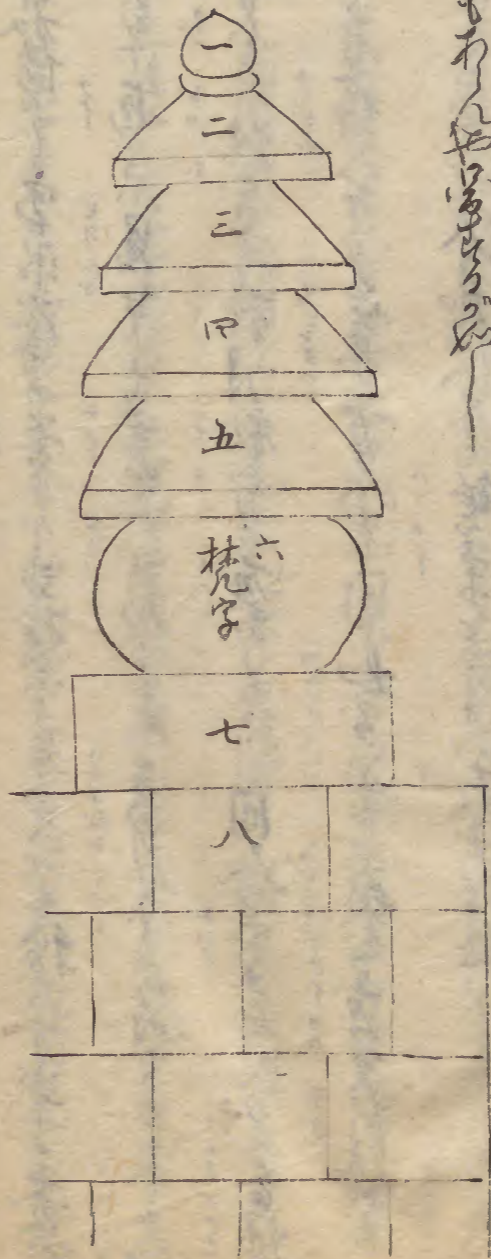








イシズケンサイ  
 クタニ マトハ  
 コマ  
 ミシロクテンワシ  
 ガ  
 中の飛騨生きたるが仲の林家のまの京約より仁徳天皇の法  
 寺  
 タラフダ  
 ミサキ  
 マウタカ  
 廟と走れしと陵ありあるとまよふ事戸修六日月の石まで  
 シン ヨブツ  
 マシ  
 クワサイ  
 一とまの古物よりも懐くふも  
 ホンシ  
 コク  
 ホンシ  
 一ひ造り六日月の丸を石の口を梵字一字づ刻り梵字の口  
 ツク  
 口をわんば家なる也



ソレニシトクタイ マウミシ テシノウ ラニコ  
 テイイ ウキ ナニハ タカ  
 夫に徳帝、高祖天皇の皇子なり中務七代の孝信即ち難波の  
 ツ ミヤ ミヤコ  
 ナニロ  
 海の宮に於てあり 己亥年三月十六日室筭百十に果して難波は  
 ホウ ブンクワ  
 別下あり文化元亥年ありて一千四百十八年小治政ありて  
 ミサキギ ユエコ ウレゴミゴモンウチイミコシシタラテ トウイニ ダニラツ セント  
 後のあり所謂半は馬の角なる古寺高野山高野院の檀越ありて先  
 サノカミガイセ コ、ラヤ タテ テン  
 エケウシヨ ヤマト セツツ  
 侍者も亦小高野の建つとあり指さるる古伝者知りて夫の建つ  
 レウナイ  
 ニシトクタイ ミサキギ  
 男も如あんにむりしと高野山ありては仁徳天皇の陵とせし侍  
 ソマツ モノウク フモ トウケイタイ エキヤウ タテ ラホ カラマウ  
 藤原山ありて是れ思ひく高野山に神建つと云ふ事ありて  
 キヨセイ  
 ゴンシヨ  
 一 東武野の竹村高野山高野院に寺 日蓮 高野山ありて東武野に門

十八











ジハツ

ケイセイアケマキ

イケン

て自教一々禪信せあるハ徳城徳角の事ありたり是む易

院のまぶらたの教の内

今ハ山常小

お對するや中を譲り候件助が候

居居後の徳今花

川町の戸に書きたる是助六より

戸に書きたる是助六より

と書きたる是助六より

内字にせりしんり親談

最上層の

は徳平の文に云々

ハカリ

ふあり相対死の節あり

後角が月日とあるは

徳平が月日とあるは

徳平が月日とあるは

月日とあるは徳平の

その教と感化者

上層の徳角

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは

後角が月日とあるは



花川戸

戸澤氏

癸 兼 應 二 歳

歸空 西入淨心信士 靈位

己二月十一日

預祈 緑譽禎三信女 壽

中拾

一 本武彦守之彦所見之山竹林也 日蓮

千路本の坂下ありて新橋

隆正院は信守の為小障りありて其のまゝなる方小百夜橋

より一棟の名氣ありて江戸妙子に載りしが今ハ指折り松樹の

ゆゑに権代今唯形代のこを遣りて波能通二千風書一經丹南

ちりて指折り松樹の考き入留りて

ありて其の原を止む

一 ありて地を指折り松樹の考き入留りて

ありて地を指折り松樹の考き入留りて

ありて地を指折り松樹の考き入留りて

ありて地を指折り松樹の考き入留りて

ありて地を指折り松樹の考き入留りて

ありて地を指折り松樹の考き入留りて







ワチンカン コロノナク シミツグ セイ トコロテン メイサレ ノナカ  
 和年方の八師才の流るし制しらん若を名なして和東  
 コロボト スム ヒサキ トコロテレ ヤメミウラヤマスベイ ガツ  
 名をよめ同のま位をの瀬一がを年八ん若を止浦を名流る名号  
 ミラチシヤ ゲ バスハ (シヒ) ワウタイ ミゲ ノキ  
 と批打をとりたり実りもゆ末の斤郵を名流る名号  
 ロラアキ エキロ ラモルケ ホンゲン  
 名流るもふ葉葉うて流流の面取ありと和師才の井の中流を  
 スベ コノヒ マシナバ シミツグ トリウケ ハウヂエジ  
 名流るも流る流流も安流と師才の流流も流るも流る流流も  
 テイキウ ノナカ イ セウ クリリ アシナリ テイセン  
 名流るも流る流流も流る流流も流る流流も流る流流も  
 ノヅ ミツグ クミ ササヤカ アマ メイスイ  
 井中と流るも流る流流も流る流流も流る流流も流る流流も  
 ジソウ イウク ケイダイヂ シタ シミツグ ワキ  
 おん流る流流の目流るの境内北の流る流流も流る流流も流る流流も  
 スイケン アイツク ミキ スナ ツタ コノエ ツイ サラ ミト  
 と流流相を下り校りて流流も流流も流流も流流も流流も流流も

モノ  
 と流るも流る流流も流る流流も流る流流も流る流流も流る流流も  
 ロトリイダ セシ チヤ キツ メイスイ クミアゲ  
 流るも流る流流も流る流流も流る流流も流る流流も流る流流も  
 スコ ニホ ゴト レイスイ マ ア  
 かりありありと流流も流流も流流も流流も流流も流流も  
 セウカ ナ、 クマ ナシ ナガ キヨ クムイサキヨ  
 の流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も  
 コゴ  
 古流るも流る流流も  
 ケイダイケイミライミゾグチケ シタ ヤシキ アイミヨ キウシ バウセウ  
 一 流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も  
 シタヤ ハシズイイイン チユソウ レウセキカヂ シニ (イエ  
 ありと流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も  
 (シレイコノチ レウセキ キア デニライ  
 流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も  
 モクフツ ナガウソシ ミタケ トウジ ラサ ホンドウ  
 の流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も流流も



















一 同知氷川大明神を日賜す 青洞 コロサシ ゼンシシモ トナ

四 糸々元名谷の後山ありーと海を宗子夜流を物授る

シキリ リンジ ヌツリ

信切し神を之語 阿日痛子の境内に神の意より後山を勿痛

若仁の方へ傳はるる此留ありと此が此の神の事と神を其合と

クワンゼヤン ニシタナ

此一 此世の事は長き寸分ありとて是を古田在る事持受

トウトウクワラウ ヒサウ カタナ メヌキ

道乃 神の代に秘蔵あり一力の目覚あり一は侍ふ今本像の

ハラコモリ エンブツ クワンゼヤン ヒコウ

後流一々本像の記世を氷川神の代に傳はるる此傳はるる此

ホシチフツ

の十七日と例をさす一神の事とて

レイサイ カグラ ホウナラ

一 此の神の社あるの代に神降す康申神の古神ありてまを板をさす

ヤシロマン カキキワ カラシマチ コヒ アラ イタイシ

タテラヨリ ヨコ

望見此の社を横九寸余あるらん寸余を野面の神に傳は

カミラ ア ムネ

く此の方相するらんを合するらん此の神に傳はるる



一 此の神の山を此地より傳はるる

カムロヒ クワラツムトモ スミ ヨワイ

ユキアワ ヤノビ

て此の神の山を此地より傳はるる

メイノワラシ ジセツ ノボ エノ アシメ

明神の山を此地より傳はるる

シ ヨロマン ニハ

此の神の山を此地より傳はるる

シラズイバズ アラキガマツセトヤ



チウエモン 五ヶナシ カリフメ ワツラキ シゴ ノゾ カノ 一ヒ  
 ちちの夫婦の五日後初めはりか 五日後に 彼が ちちの妻と云う  
 モノカク シ 一チ オシセウ シエユ ワツラ ソキ  
 くおぼろて 五日後の 後 ちちの妻と云う 五日後の 須臾に ちちの妻と云う  
 アイダ クワイダン

拾文

一 在武彦中 日長山 領言寺 日蓮 修福寺の あり 藤の あり の 同山 威  
 ノウジ 子エシヨクニテテウ シヨダイ ケイアン シモツキ  
 意者の 任藏 日長と 初代 ちちの 母 日長は 安仁年 卯月 廿七  
 セシゲ ミナブサンクランジ エンセンインニツケウ ハカ サイセウ ソバ  
 日 近 任 藏 又 父 延 山 之 遠 寺 遠 沾 院 日 亨 の 墓 あり 一 切 經 の 例 程  
 ナニシ フシボ カキウサ  
 一 切 經 の 例 程 あり 一 切 經 の 例 程 あり 一 切 經 の 例 程 あり

享保六年 辛丑年  
 身延山遠沾院日亨上人  
 十二月二十六日

明本一切經 日本三ヶ所 京都満願寺 身延山祖師堂下 當寺

ケウシ サクラ ニツケウ ホゼシ  
 一 草師 橋より 日亨の 墓あり あり 一 日亨 七世の 母 皮骨の 橋 杉 枝  
 一 草師 橋より 日亨の 墓あり あり 一 日亨 七世の 母 皮骨の 橋 杉 枝  
 ハナサク カワダニ ハア ヒトエ ハサクダイ ララガキ ニ シラケウ  
 一 草師 橋より 日亨の 墓あり あり 一 日亨 七世の 母 皮骨の 橋 杉 枝  
 シイキ タイボク トリワケ キ コボク トウナカ ホラ  
 一 草師 橋より 日亨の 墓あり あり 一 日亨 七世の 母 皮骨の 橋 杉 枝  
 ムツア ナカ ハニレウ  
 一 草師 橋より 日亨の 墓あり あり 一 日亨 七世の 母 皮骨の 橋 杉 枝  
 イビキ マトント シカ ヘシ クロサイ セツ シゼン  
 一 草師 橋より 日亨の 墓あり あり 一 日亨 七世の 母 皮骨の 橋 杉 枝



コノキ ミツ エシエツ ホドバシ フトササシ アム コト  
 材より清く送りて集むる如くありと如くの後ハ  
 カンクワイツ セウテン スマ  
 波谷物天也如今八抽然もんまふりて此推のふりまふりさ小  
 コラ タテ ベンガイナレ アガ シンケン クワイフツ マツ  
 祠と建てて天と崇めらるるのハ作の怪物と云ふありと云  
 スエヒロイナリ モシエ フウセウ シンタイ ヒ ツイツ  
 一本屋煙行りありありの煙とて雲散りて神と秘とて神厨  
 シ ヒラ エソウ フガ コトカネ モシイニシラケラ  
 子と云ふ代々の信持どもお守り叶ふと云ふこと遠流院自亨  
 カイゼン イナリ ヤミ シンゴスジツ ゲウハク ヲト  
 宗眼の指折の神とて正統教目の作法と初めしが抄りてと云  
 ヨツラケヲモ カイゼン イナリ シンゼラ シンタイ サボト  
 平信也云々自亨の宗眼とて指折と初法とて神神何れも程の  
 モシ ジツシヤ ジヤジン カノシロメイ セウ ノス トコロ  
 事ありとも実法の秘神ありと云ふこと後法神明也と載りての事あり  
 ミヤ ゴシシヤ レイシシ チカ  
 二七百余社の神ありと云ふは指折の霊神とて云々の抄りありと

ワクワドヤミン ナギ レイバウ シンリヨ ホト  
 和光回響の化傳と傳ゆとて神意の程ありありと云ふ事と云ふは  
 グマイ ホンブ エン ゼンドウ イテ フツシシ ホンタイ  
 思疎の凡そハ抄りて云ふこと云々道入りのことと云ふは神の事なり  
 ケウホウシシケンカイケン イナリ ナイヒツ ヒ シンタイ イカラサマ  
 有る事云々傳ゆると云ふは指折の内密と秘と神神と云ふは眼  
 ツブ ハズダ アレ ミツケウ ミノブセシ  
 も抄りて云ふこと云々傳ゆると云ふは抄りて云ふこと云々山  
 エンシエン チュシヨク ソウ クランジ マ イン ヒ  
 遠流院と云ふは秘とて傳ゆると云ふは遠流院と云ふは秘とて云  
 クワクワ ハイトウクテン ヒミツ アカ エハ  
 名号の秘とて傳ゆると云ふは秘とて傳ゆると云ふは秘とて云  
 カノ ハイトウケケツ ヒジ シシケシシ トビラレイ テン  
 改りて云ふは秘とて傳ゆると云ふは秘とて傳ゆると云ふは秘とて云  
 ツニミカク チヤエウナキ サイトウタノモ ナチニシドク  
 包隠りて云ふは秘とて傳ゆると云ふは秘とて傳ゆると云ふは秘とて云  
 モキラフ アベスケ イシキヲ テウリヲ アルヒ ナカチデシ  
 一と傳ゆると云ふは秘とて傳ゆると云ふは秘とて傳ゆると云ふは秘とて云



























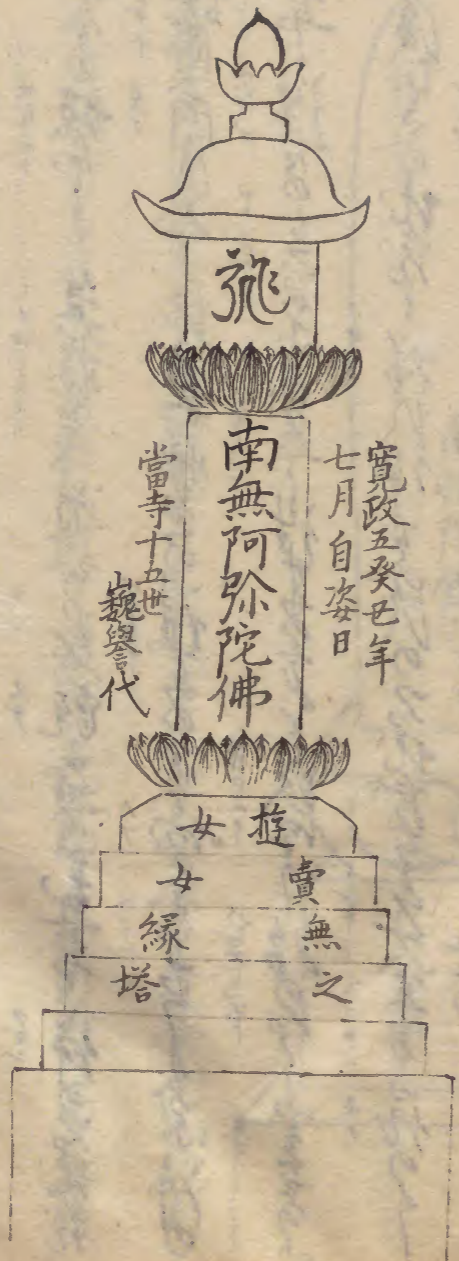




東武並福所 ありてまきち

天倉

門内 角 港 後 向 比 瓦 村



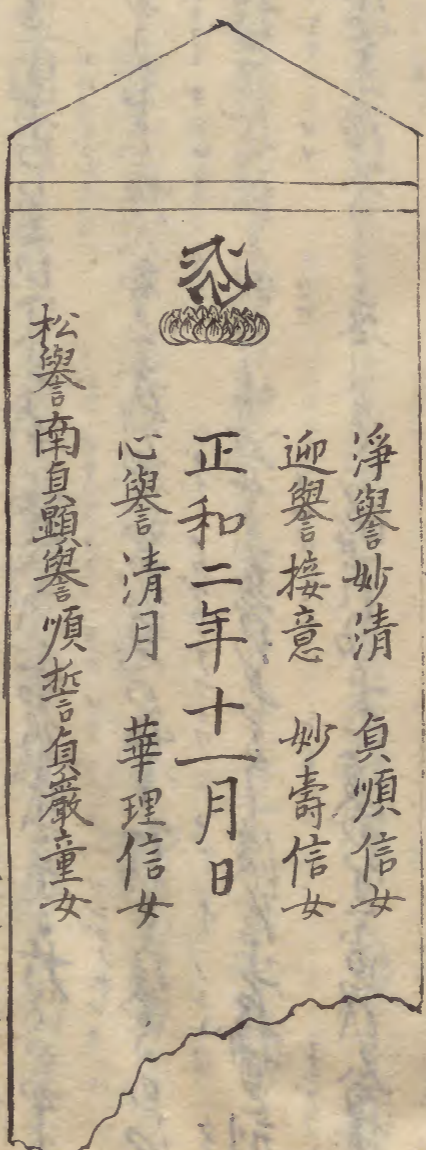
寛政五癸巳年 七月自姿日

當寺十五世 魏譽代

一 ありて新より 東所の 花女の 花と葉を 守りて 石塔 ありて 或は相 対此の こと 横墓 も ありて ありて 中 花女の 供養 塔 ありて

月 古 月 日 抄 り 源 氏 朝

右 禪 院 後 山 寺 長 持 別 大 坂 寺 之 住 持 奥 村 氏 松 尾 宗 玄 住 持 延 宝 二 乙 卯 又



淨譽妙清 眞順信女  
迎譽接意 妙壽信女  
正和二年十一月日  
心譽清月 華理信女  
松譽南真顯譽順誓負嚴童女

一回 如 右 寺 方 小 寺 右 寺 古 禪 院 あり 何 人 の 横 墓 あり 延 宝 二 乙 卯 年 八 月 九 日  
十 氏 公 禪 院 の 住 持 ありて 時 の 将 軍 八 寺 邦 宗 住 持 ありて 延 宝 二 乙 卯 年 八 月 九 日  
い づ ち 寺 方 小 寺 右 寺 古 禪 院 ありて 延 宝 二 乙 卯 年 八 月 九 日  
小 寺 右 寺 方 小 寺 右 寺 古 禪 院 ありて 延 宝 二 乙 卯 年 八 月 九 日













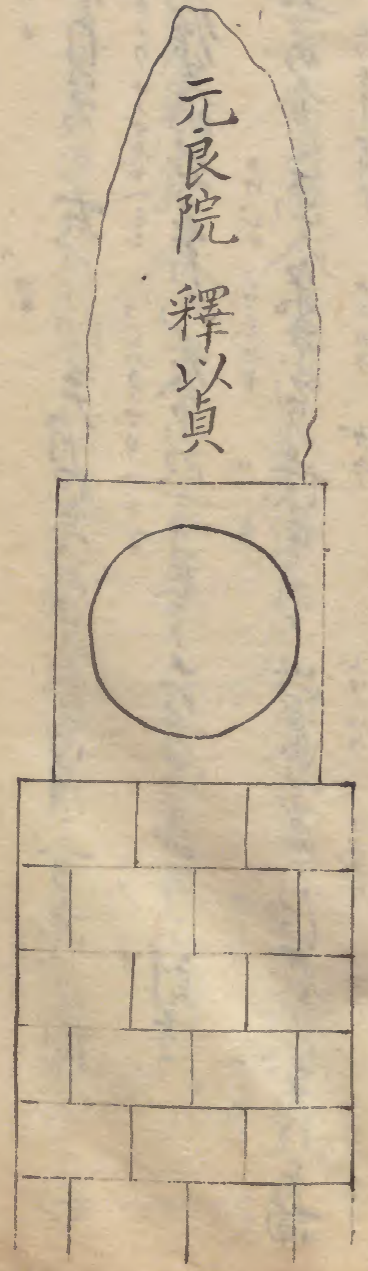






の海を渡りて暖くも城に陸軍の日當井に於て山城を以て  
 傷を負ひて即自決せしむる切腹作事も古新紙に及ぶ味  
 忠臣傳むべし山城を以ての海にありて補法者良臣と傳はるるの  
 霊を以てしむる松坂城破る南原を以て松坂を記する後天明六  
 丙午年九月八日復明を君臣共たりて田原王次を以て不審の事と  
 もいふありて一がり披き置がごとく実父を以て三より望み小舟  
 以て渡りし事をも記し一勅切別とてその身一代無し和恩を以て終  
 りて七方七士のの正統法に於て百よりあるの之明和序言年新規の集  
 三遠近橋東新相良の居城も百よりある城址も破壊し後新址を

万々も奥列城後あるの内より下りて皇孫を以て及及び病死す此時  
 小宮りて若むの政を以て兼ての存念一時不達は千載の英流を以て  
 少宮とよぶし初君を以て傳はるる松平越中守定信大光の御書  
 少補作甘も以て政事を以て行はるるを以て除藩を以てするも  
 乙亥年小宮りて宮の事二十二年小宮りて後墓たの事



元良院 釋以貞











ハナナリタケナリ

ハカシヨ

イニドセウレンイン

ヤブ

タビ トウキ

漢武成文人の墓に今戸 群衆の敷の中あり

此の墓は漢の漢代のものにして、今戸の群衆の敷の中あり

墓の主人の墓に今戸の群衆の敷の中あり

と物かろぬ

ヒクク セウレンバウ イ

センサウジ タウレンシヨトウ

サウサウ

アソ

一 松の昔の墓に今戸の群衆の敷の中あり

大平の公雅の世傳の記に、其の墓あり、其の墓あり、其の墓あり

大平の公雅の世傳の記に、其の墓あり、其の墓あり、其の墓あり

大平の公雅の世傳の記に、其の墓あり、其の墓あり、其の墓あり

大平の公雅の世傳の記に、其の墓あり、其の墓あり、其の墓あり

大平の公雅の世傳の記に、其の墓あり、其の墓あり、其の墓あり

抄拾

一 東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

抄拾

一 東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり

東武の墓に今戸の群衆の敷の中あり







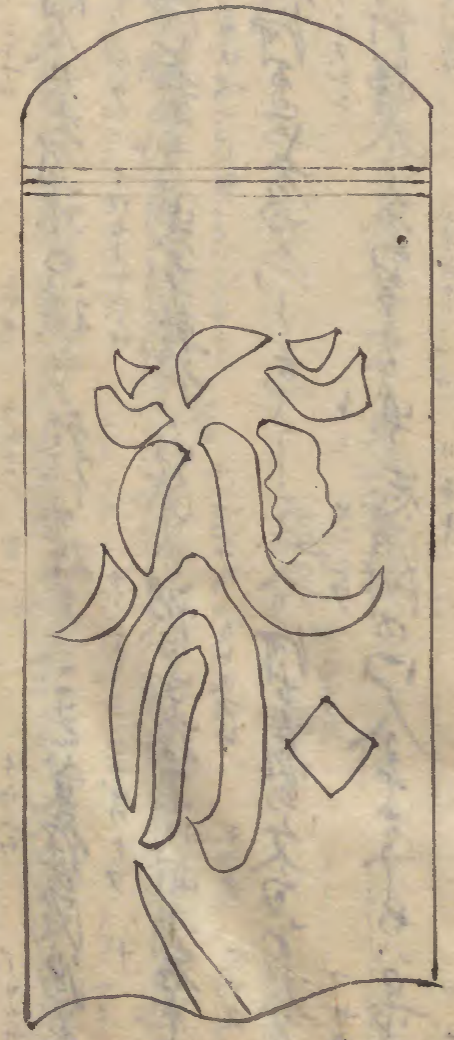
シハキガチ ケ  
 サイフツ  
 西佛の内あり地蔵尊  
 セキトラッ  
 石像のまじり



ナガラソシ レシゲガサ クワヒシ フホ カツミタ  
 ハシラアリマカミ サルツ ヨラ  
 石像のまじり地蔵尊の蓮花のり花輪もまじりそのありは日本古来の石  
 像のまじり

神像

ニワウモシ イナリ シヤゼン カマタサイフツ セ ドウセウ イマ  
 ジイシガミ イタツ フル センバウイシ フテ スベ トウジ エ  
 字の禪ありしむまじりその傳へては法所の尊もまじりそのまじり  
 ド コセキ センサク ウツモ チンキ ヒシゲツ  
 法所の尊ありしむまじりその傳へては法所の尊もまじりそのまじり  
 ナギシ クワカイ ヒ ナ  
 カシドク シヤゼン  
 石像のまじり



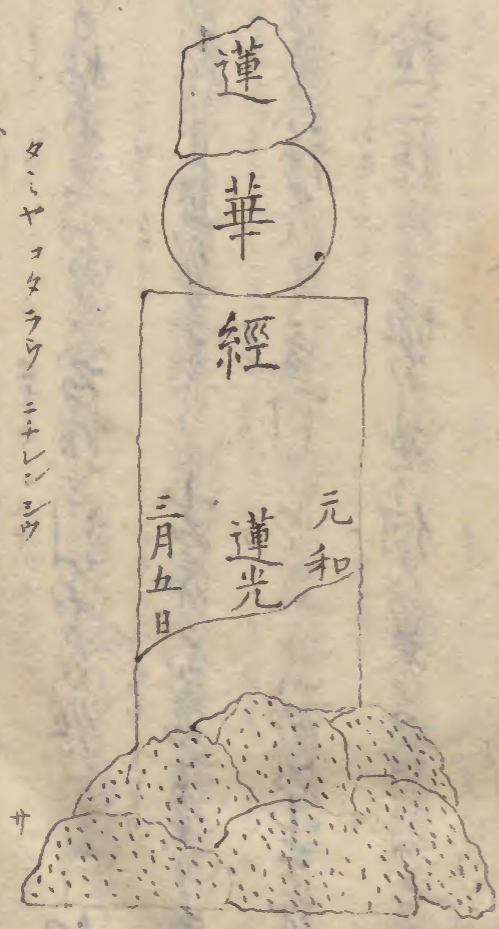






デウカ アリ  
 セウセウトウ サシエウ マルガメ セウシエケクノノ  
 の際小治り如く世傳り山後より小治列丸飛の城を京極に  
 カミカチアタミヤバウ  
 シル アヤマ  
 ちあき多々切若原と記し一語をわし何物か拾万金を成  
 ヨツ  
 ミカマ イ  
 して九龍の城をさう一時の事あり候今も小治の居やさふおまの  
 トヒ ナシヨグサシ デアキウト ロバウ  
 コシヒラジシ クラセウ  
 合見所と勅後十向八部野の男系系一商人治修  
 ニキウ イコマ コシヒラ ヨビ トラ  
 ケウケクケ ツギイ  
 居がまを獲ひし物の重良殿 唯虎の山外京極の小治  
 ハンゼウ イヒ  
 ホメウ  
 鯨魚をさう此謂く又多々留を所小治は右小治守にたらしは  
 シノクラセウイモ  
 ミリ  
 ゼウルケルホシ サクシヤ  
 上野院小治事を知りて年降臨福本の地を合見所  
 リセウ ハナウノホマ イデミ ゲグイ ナツ トシチセウ  
 利を成りて花の御堂に碑を建てて号を置けり  
 フンボ ムエシ  
 シエフクケウ  
 のとや但多々切若原と今も言傳りありやん修後加

カタチ ノゴ スナウ  
 ゼウケンソクシニダクドコロセウカワシイシチニ  
 又ヤスハチ  
 エは官称は残りあり 常憲を名はるは是は淨光院又曰安宗  
 タケケウ ストクワイイシチンレウゴバウ  
 カワズ  
 モト  
 武内少輔光院殿の御殿の後より好事の人を召し置りて  
 シツフ サタキ ウチ コウガシ ツタ  
 ゴト フンボ モゲウ  
 又よ一実父の歌と討し奉る巷談は傳り如く横墓の掘取た高  
 なるがやい



フンボ  
 タニヤコタラウ ニナレシウ  
 右の横墓より金銀多々切若原八日蓮あり  
 フンボ  
 ナウコ











ツキナ カクヤヒン シル カウメイ マジロ  
の義武人蘇夜姫ト云ありと語りむりう言者古くも同小名  
此かぐの如くかまばら玉の玉ありて不滅死す一命を以て其の元ツ  
キウセキ  
小直流あり事なりや佐流辨ふえりふいさ同名其人ありて  
ニキミヤ コウカン マツ トウメウ イシシ  
比叡者の後劫と謂ふ

一 同公柳の井日向く聖天の御柳井者の名中より此と云所也  
トヤエウツカ フヤイドト メイスイ ヨツ コノベツトウ リセセイトウ  
胡をふるの歌井よりて名水といひ傳はれ此別名と柳井者  
ナツ ケダシ メイスイ マヨ  
早もすも其名水より起す  
ヤナカ セイウシジ ヨ、タトウケウシラフ フナ ガロシライニホク  
一 東武宮中より雲より 曹洞 小右衛門清海の形を松の木のありて  
ありし跡拾余々年必あ一樹に拾ふ今も一樹の葉ありて其の葉  
カロシライニホク

抄拾

ニツホリムラ ドラケウレンゲイ エン マーダ モチスケニワトウ  
日暮村に今人の名流屋や一系も古田なる事拾遺入るのか  
シロ  
城ありしと云流原目くじも久山ありての流道流のありてあり  
ワタリ タカ  
巨流ありてと云事余ありて地を一耕する事又は其流を築  
ミハウ エンバウ ヨウ フウケイ  
一 流何れかまも遠くを流す不流その風景より一  
ゴゼウナイヒラコウ フシツキタテ カシダヤナギワライイ  
流城内平川ありて流し九流築て一系田柳と云流傳りて  
ウノニワウモン ウツ クワンエイジ サウ  
その流上野に皇の如く極まれ一宮舎の草創よりて流す  
イナユ トウケウシラフ テシロ ヨシ ヴタ  
地(移)石流にまじりて流流城の内をありて一は流を流す  
フニボ ウチジミ サウミウバタイジシ ジンソウ  
墳墓ハ討死す相別大ありてありて守備かおありて  
シヌヤレイキサン ホウフクシ ミシテラマテ  
一 東武小直流山法橋守 曹洞 新寺町ありて南寺に相別大城の

二拾











一 池の東山の一角を千代松とよび又千代松を以て池の東山を名づく

義典の奥方から夫の生家なるより池の東山に松ありと云ふ千代松の事

婦人の名あり甚目其の代後より此松を以て千代松と云ふ起る池の東山に松あり

大なる方より其より池の方より松の及揚と掛りて其の揚也と云ふ言を以て

余松の東山の角に大なる古松あり其松を以て千代松と云ふ言を以て

昔此松被禱と云ふ事あり入水せりて今古松の言を以て松松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

又此松の段より其松を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

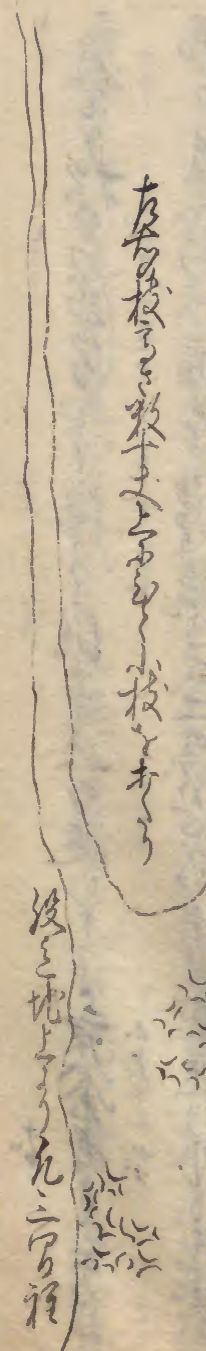
此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事

此松松と云ふ根より上言を以て千代松と云ふ言を以て千代松と云ふ事





一 衣が松のたつた砂るを隔る流あり一の滝のまゝ完全なる高きなる斗

あり東に折る堰を越流し又一の滝あり西に送るゆるゆるたる

ながせとせらる余又一の滝あり東に逆流する流あり

流の汀に流るるゆるゆるたる流のたつた余故に一の流のまゝなるに

大なる勢甚く尖る滝のまゝゆるゆるたる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流の逆流と堰せし流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり

ゆるゆるたる流ありゆるゆるたる流のまゝなる流あり







イケ  
ヒバウ  
スソドラ  
ヒラフケケ  
キレナイチク  
スジツケシ  
タイチテ

一 沈の東の諸儀代山の掃きりたるまは現行の金路行の松十石を

まう俣三石の徳探りたる九倉とすたる掃く松十石を

まう角一本松をまうの掃く松十石を

一 事の後に東向の山をまうの掃く松十石を

まう二抱の掃く松十石を

まう山林の掃く松十石を

一 回の掃く松十石を

一 回の掃く松十石を

一 回の掃く松十石を

一 回の掃く松十石を

一 回の掃く松十石を

一 回の掃く松十石を

一 回の掃く松十石を

一 回の掃く松十石を

一 回の掃く松十石を

一 回の掃く松十石を

一 回の掃く松十石を

一 回の掃く松十石を







モシシ  
右文字よりいふ所は、  
ニシ  
モタ  
スケイボリ  
ガシイシツラ  
ヒキ  
ナガウ  
ヲボ

一 藤

ハノ國と稱する所よりハ辰ノ一ノ其何ありハ一ノ其  
アシクエハラゴリシモメクロムライリヤリヤケイガシナシセウジ  
一 武列在系那小日守村入名龍溪山中書寺 青岡  
フドウ  
シノ河原の山側ありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり  
セウ ヨ、コムソウ トスメ ヒヨクツカ  
ナカゴロ ムギ  
稱す世々虚名傳の流傳り此龍と比譽塚と云ふ所ありて  
マツカゼ コスエ ヲトツレ ワビ セキレウ コ、マシダ タ  
古く松樹と云ふ所の、  
ケウエラウ ツイノチケイ シ ヒライゴシハチラウ フケチラ  
幼龍と云ふ所ありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり  
ミギノサイマチ ミシヤウガキ ゴセンサク ミ ラキトコロ フケチラ  
御在所と云ふ人相書と云ふ所ありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり  
アレンジニ シテイ ヤク シノ イ エヒ ヲシモラキ  
龍宮と云ふ所の約と云ふ所ありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり

ノノアレンジエカチ ヒツカ コ、ホウム シン ケーセイ  
後龍宮を築く所ありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり  
セーノクモダシ カキラキ ジメツ ルイ ヱカ  
日ノ影の跡ありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり  
ウツ ヒヨクツカ ナガ  
埋めて比譽塚と云ふ所ありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり  
目ノ影の跡ありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり  
カノツカ トラヨク ハテ  
今ノ心遣いありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり  
ホド カキチキウ ルイ ツチ ハレイシ ラク  
門内行かぬ所の垣根跡ありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり  
ナシニヨ セシカウ クウ フカシ テイアマ ソマツ セキヒ  
スウ程の田舎跡ありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり  
カワラ ナマ  
ありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり

一 松

武列在系那矢村新田大明神の一件上龍宮と云ふ所ありて号と云ふ所の下も又龍宮と云ふ所あり











ホリツケ

ミシダニ

彫りつゝ此の辰落鏡子ありしと云ふに...

也と思ひしは浅井のことが編。東海名所記を全し...

の如くつゝやどせば大師は東より西ありし...

て自刃の凶形と云ふはあり有縁の地と云ふ...

あふまき年終り後深浦小流ありの...

一より大師は東村と云ふは...

此の書は永年中の事と云ふは...

若好と違ひし高堂と云ふは...

と云ひしは或夜の事大師事あり...

夜明け後書物の事と云ふは...

よそを第一對物と云ふは...

その書ありし書物又此の如く...

此の如く思ふに余は此の書物...

今此の書物と云ふは...

此の書物と云ふは...

一大師の如く後明地にて...

此の書物と云ふは...

カワサキ

カワボウ

リウサカワ

アガ

アガ

アガ

アガ

アガ

アガ

アガ

アガ

アガ

アガ

アガ

アガ

アガ

アガ







流し場や人よ声のけし子

同

二瘡

一或別々の根田の渡原小舟をばきて拾ひての奥まで人小舟をせり

川原の方へ流し場を清かき川流を眺むるまは右の方か別れつぎ

荻原小舟くしき無りたのて六根田の渡一の葦原より別れんか

天赤く松東と人のあふくつとけしきをばして又を小舟の流し小舟

あふく連きつるの風情を眺むつ折らるく住無りたにりんか

か別れたの方小舟松東の汀小舟をばして又を小舟の流し小舟

根田の糸天のりよ上りし山にぶくきりて川原と天と村に流し大

師の三祀より相別れり海むるを思ふ天女回折ありきまへ合

平一衣淳和帝のしやう天長七庚戌の年法法大師はあまのつやを

小糸あはれり一時むるあまのつやをいふありき天女あはれり十

又言ふつらとあはれりつらとあはれりつらとあはれりつらとあはれり

一あひいよもり念が松東の信力を起しあひあふ天女あはれり

すまきまの像と彫刻しむるあまのつやをいふありき天女あはれり

あまのつやをいふありき天女あはれりつらとあはれりつらとあはれり

天女のそ像と文福の流し小舟をばして又を小舟の流し小舟

天女のそ像と刻し法法大師流し小舟のあはれりつらとあはれり

まゝの一所あまのつやをいふありき天女あはれりつらとあはれり

あまのつやをいふありき天女あはれりつらとあはれりつらとあはれり











菴を去仙を人の室小憩ひあぐさ

滄溟海の眺をふや時とて片づく

渺くしやも根根田あり一舟の浮

そとくうきうきとくまのたるを

蘇傍

以凡

淵岩

○

海向ひく根根田りまをたれこり

ちちくもかきる丁の記つ

蘇傍

以凡

淵岩

○

河の敷きしきくも群をるれ海

蘇傍

根根田より海ふをひく波除地を

大森村を丸田里余の耕地の写

途中の吟

内尔居て地獄はくさくさなる

氣もくさくさふれふ山く

淵岩

以凡

○

三



一 武列所の狀龍今海軍の 禪 七セウ ヲ、ホトケ カシ

以酒樽のあまらう南寺小見首羯磨の正化より荒神をよき世に

名あふきふ降りて別當ふまめりてこまて千載荒神と稱て世

名より荒神をのたまふ又同毎月廿八日ある傳へて又例なき有

廿七日廿八日又霜月廿七日廿八日のあまらうこれにて神事あり

て神事ありて初部の男女ふまめりてあまらう荒神の傳指

あまらう初りて傳へてこれよりあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて

あまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へてあまらう傳へて





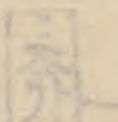










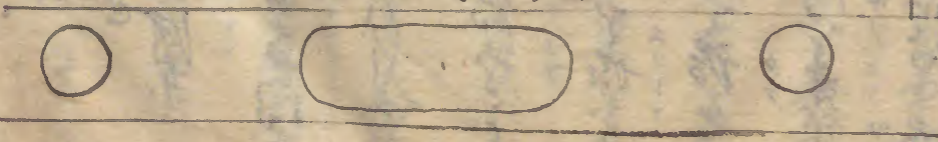


ギョウジチ ジムソウ エカイ バンドウ シンスイ チヤハウ マナ キ ハシスミ ラレ  
 改初年の次は信房を海へ追放新永小業法を命じて其の獨居の折に  
ニツク トウエン センセイ コフツ アキハ ミンケワン シ カナル シモノ マカ  
 似せ給ふ宗室を命じて古風を命じて其の秋宗海船を命じて之を流るに  
セイタン エカイ カワツケ ケニ シシ キ  
 其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて  
モハヤ カトウ フニ シヨタイ イトウ マス ミドク シシ キ  
 其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて  
トウクワイ セキヒ カテ カトウ ホダイ シヨ ツキ チ ホシ  
 六代を同命の石碑に命じて其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて  
クワン シ チ ナイ セツ セツ シ フシ ボ ム シヨ チ セ バ  
 其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて  
トク カテ コト ハヤリ フツ ジン チ ヤン  
 其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて  
チ コ シヤク シ ム セツ ヒ ヲ ノ ナ ウ ラ シ ゴ シ タ ホ ツ ク  
 其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて  
シ タ キ ツ ケ ヘ タ フ ガ ク コ ラ セ イ ツ タ  
 其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて其の流るに事ありて  
シ タ キ ツ ケ ヘ タ フ ガ ク コ ラ セ イ ツ タ

河東の同命の碑の事

元祖	釋清西	信士
二世	妙屋紹音	信士
三世	潭譽澄瑞	信士
四世	一法圓諦	信士
五世	曉暎院遊山東雲	居士
六世	妙音院正山道栄	居士

十寸見河東墓











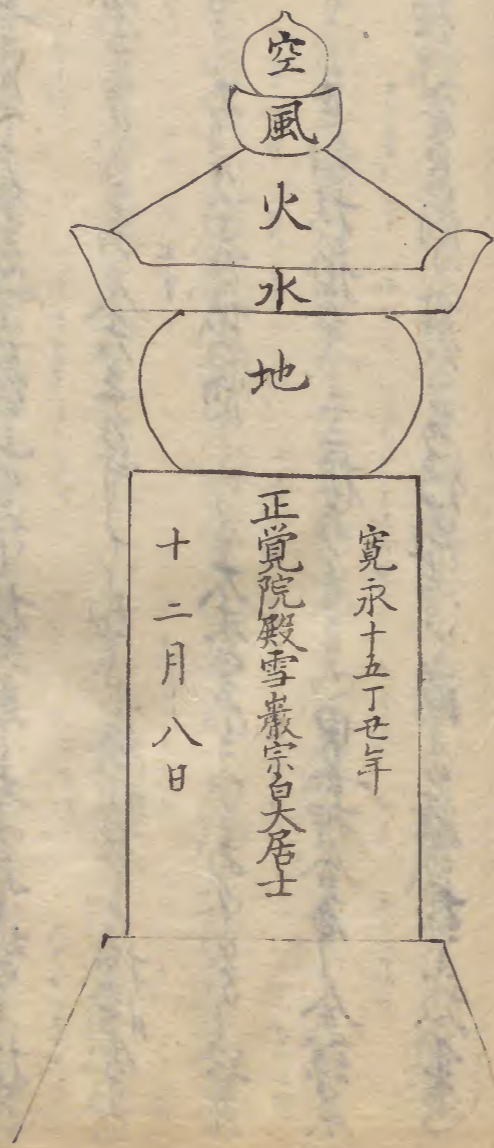




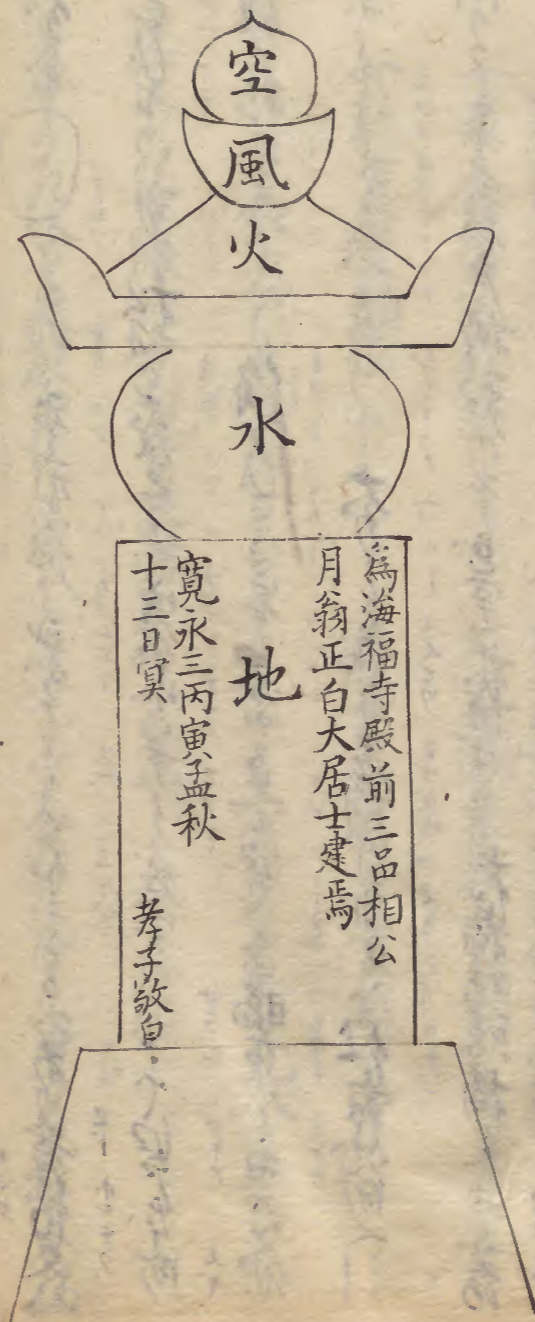




寛永九年  
春同妙香大禪定尼  
正月三日



空  
風  
火  
水  
地  
寛永十五年  
正覺院殿雪巖宗皇居士  
十二月八日



空  
風  
火  
水  
地  
爲海福寺殿前三品相公  
月翁正白大居士建焉  
寛永三丙寅孟秋  
十三日冥  
孝子敬白

トヨトミケ ランユ シヨアウ  
カワトシヨウ  
コフシ アリサマ  
い 若くは其の願の法徳ありし世より年移りて今古後の空神何  
カソイキウスク カイフクビ デシ  
三ナリ セウカクシ デシ  
シナシ ミユシ  
お懐にかゝりて海福寺殿より空正則の正身等後より空正則の法身等  
トウメウカウニ ハスメ スハヨ フクシマサモン ヤマナエキエクルシマイ  
同妙香大禪定尼の女ありて其の世の今古移りて山名親負の首治伊  
ヨノカニ ヲケトミ トムラ フシホ  
後者の空正則の首治伊の世より其の世の今古移りて山名親負の首治伊







小住傳一十傳より大木等々傳を子孫といふなりわきとありて流系  
シニヒキ ソタ フキ カサフアマタ シツカワイ  
かきく流も又松かきく流と云ふ一短冊松あり申す本傳とあり  
ツタ ジンシロ クワイキウ セイタン  
まあり自身も木とて傳へて流系なり

思ひ事ある人海をたぐりて流の山流ありて  
マゲチ フクニキ ニワ イマ クロエツ  
たきつる屋中より山流あり九十五分を占めあり屋中の流は山井  
イシラヒニ トリツツ ヤマ ナシメシ キウ カラキ  
也い石野く流ありて山と云ふ流は松の樹と石の  
ウノコト シヨボク カリコヒセシスイ ハシ フゼイ ヒシ フヒシロ カク  
松也又流も又川に流るる松と云ふ一山流一山井一山井  
シビツ マシナイ ツギ ニロ ドラダツ  
子孫は山井とありて流の山井といふなり小右衛門とありて  
コジエ シエ ツギ カチキ セシラシ  
の古樹松は流と伝へて一松の樹を山井と伝へてありて一山井といふ

ボクシ カワシ  
杜若の流傳りたる例は杜若の樹ニ種度をもて流は又蒲苗松細流  
ナリ ヨロシ ヨハシ カヤモン スギ リンゼン  
まの形も七九の流小松と云ふ山井と云ふ二山井の林系なり  
スキヤ ニ ガシキ ハハ ヨクエキ ナシメシ ムツサク ミカワハシマ  
小松も山井といふなり流ありて山井といふ山井の流は造地の流なり  
キレイ エニカワ コヒ テイセウ フウケク ナワハク セシスイ  
山井の流も山井といふなり流ありて山井といふ山井の流は造地の流なり  
タキクチ ツツガルマ シカサ コボク スイメシ コヨク  
山井の流も山井といふなり流ありて山井といふ山井の流は造地の流なり  
フウ カリコヒ フゼイ ラシシロ ツ  
山井の流も山井といふなり流ありて山井といふ山井の流は造地の流なり  
キボククワイヒキ トシラシ  
九二山井の流も山井といふなり流ありて山井といふ山井の流は造地の流なり  
ハルカ アヤヒカワ ナガ ベシバウ トリ カワチ ノゾ フウケク ナワハク  
山井の流も山井といふなり流ありて山井といふ山井の流は造地の流なり  
カキヤウ カク コシヤウシキ ナガ  
山井の流も山井といふなり流ありて山井といふ山井の流は造地の流なり























フニボ フヨ ヤシロ ソワレイ ツカ クラモト ナシメシ  
 遠正の墳墓及び社に奉祀せられた墳墓に於て小塚千社に  
 祀らるる事 例月吉日ハ一人の群衆ハ遠正の墓を稱奉  
 して祭事せらるる事  
 ソワナワ

四九

一 東武牛区天所雲布の奉養 昔同 後所海抄の奉養  
 當りの爲に揚子義操徳の張子の類ハ人誠禪師の事ハ  
 丁未年秋社多と記さる南宮内基其源にて門より本堂まで  
 町余古抄の例ハ銘記の目よりハ後抄ハ牛区氏代々の墓あり  
 ハ上野の侯人大胡右衛門後の歴代より横巻のつるがれと樹下の  
 の墓にて也三波の後ハつるがれハ一ノ角の補中ハ武別考考牛

一 東武牛区天所雲布の奉養 昔同 後所海抄の奉養  
 當りの爲に揚子義操徳の張子の類ハ人誠禪師の事ハ  
 丁未年秋社多と記さる南宮内基其源にて門より本堂まで  
 町余古抄の例ハ銘記の目よりハ後抄ハ牛区氏代々の墓あり  
 ハ上野の侯人大胡右衛門後の歴代より横巻のつるがれと樹下の  
 の墓にて也三波の後ハつるがれハ一ノ角の補中ハ武別考考牛

貞享四丁卯年  
 時樂院殿藤原重志大居士  
 十二月九日

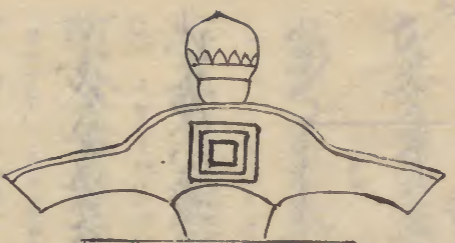
五拾

一 東武牛区天所雲布の奉養 昔同 後所海抄の奉養  
 當りの爲に揚子義操徳の張子の類ハ人誠禪師の事ハ  
 丁未年秋社多と記さる南宮内基其源にて門より本堂まで  
 町余古抄の例ハ銘記の目よりハ後抄ハ牛区氏代々の墓あり  
 ハ上野の侯人大胡右衛門後の歴代より横巻のつるがれと樹下の  
 の墓にて也三波の後ハつるがれハ一ノ角の補中ハ武別考考牛

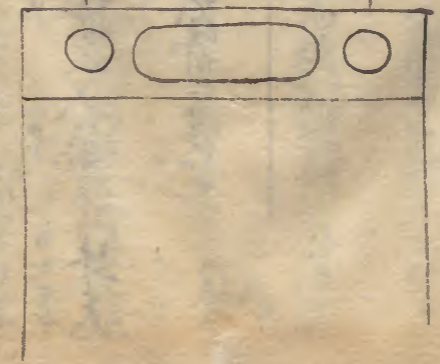




アムチ ヒハツ  
 一門 奉入室 覺栄 元禄十七甲午二月十九日  
 二法 奉栢庭 隨性 信士 宝曆八戊寅九月十四日  
 三還 奉浄本 臺遊 汰子 文化三丙寅年十月晦日  
 市川宗子所刻 右の栢は 釋世の 方と 辨りたる如し



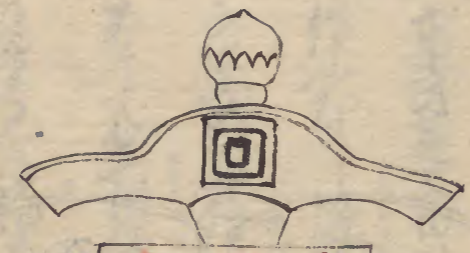
一門 奉入室 覺栄 元禄十七甲午二月十九日  
 二法 奉栢庭 隨性 信士 宝曆八戊寅九月十四日  
 三還 奉浄本 臺遊 汰子 文化三丙寅年十月晦日



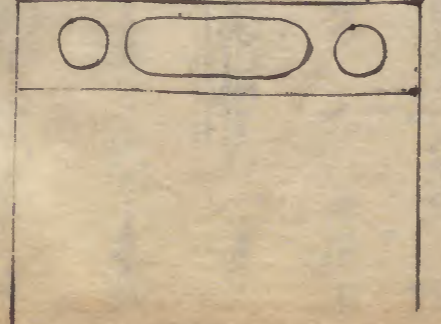
戒名の下に 宗子とありて 八宗子所刻の 栢と 辨りたる如し

〔石〕

一 同 名 地 中 津 運 院 常 照 院 の 向 前 あり 當 宗 宗 承 正 徳 何 以 氏 氏 名 あり 一 宗 承 正 徳 何 以 氏 氏 名 あり 碑 の 落 日 曰 先生 姓 源 佐 木 氏 諱 淵 龍 字 文 山 以 字 行 于 世 去 龍 之 子 也 云 々 名 々




三 隨 善 定 縁 覺 性 信 士 寛 保 二 戊 午 二 月 廿 七 日  
 四 廓 善 悟 粒 隨 然 法 子 安 永 七 戊 寅 三 月 朔  
 六 皆 奉 自 到 本 判 信 士 寛 政 十 一 己 未 年 五 月 十 三 日




右の栢は 釋世の 方と 辨りたる如し



フリフホクケロトウ ゼン ツシメウ ヒヤクスケ ニシ クホ カニ ニウホクドク ナガカ  
 襲要承<sup>シ</sup>種<sup>ト</sup>通<sup>シ</sup>名<sup>ヲ</sup>百<sup>ノ</sup>助<sup>ノ</sup>為<sup>ノ</sup>實<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>入<sup>レ</sup>本<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>示<sup>レ</sup>名<sup>ヲ</sup>かり<sup>キ</sup>  
セイシツバタタサテ メイテイ ヒトシフ ヒツリヨク サキ  
 性<sup>ノ</sup>質<sup>ノ</sup>甚<sup>ニ</sup>酒<sup>ヲ</sup>嗜<sup>ス</sup>の<sup>レ</sup>跡<sup>ヲ</sup>可<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>入<sup>レ</sup>力<sup>ヲ</sup>め<sup>テ</sup>あり<sup>キ</sup>と<sup>ル</sup>ん<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>道<sup>ヲ</sup>  
ゲレツブンザン サシ シカ トリ サキ  
 玄<sup>ノ</sup>竜<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>人<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>武<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>お<sup>シ</sup>と<sup>ル</sup>ん<sup>ノ</sup>今<sup>ノ</sup>も<sup>も</sup>侍<sup>ノ</sup>末<sup>ノ</sup>百<sup>ノ</sup>助<sup>ト</sup>身<sup>ト</sup>  
マツダイラサスキ ハニチウ シソロ カノセウ コニボ  
 一 松<sup>ノ</sup>平<sup>ノ</sup>清<sup>ノ</sup>波<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>落<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>の<sup>レ</sup>横<sup>ノ</sup>養<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>

  
 享保三年乙卯五月七日  
 流芳院發誓言黑花文山居士  
 示現院植誓言德本文源居士  
 天明元辛酉年九月八日

  
 享保八年卯年  
 領春院真誓言琉靈玄龍居士  
 二月二十二日

一 東<sup>ノ</sup>武<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>向<sup>ノ</sup>ひ<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>坂<sup>ノ</sup>池<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>運<sup>ノ</sup>方<sup>ト</sup> 曹洞 ケイダイ ツナツカ  
シバミタ リウゴクサンカウシジ 曹洞 ケイダイ ツナツカ  
 侍<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>海<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>船<sup>ノ</sup>先<sup>ノ</sup>今<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>定<sup>ト</sup> ロクニハゲンデツテ フシホ ヨアヒ  
ハルサワゴホリケラス エキ カニガハ エキ ミタムラ  
 了<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>機<sup>ノ</sup>機<sup>ノ</sup>成<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>景<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>跡<sup>ヲ</sup>と<sup>ル</sup>ん<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>あり<sup>キ</sup>  
ミタムラ ツナ  
 あり<sup>キ</sup>其<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>あり<sup>キ</sup>と<sup>ル</sup>ん<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>あり<sup>キ</sup>  
ツナ イセ チメ トツ ミツ  
 の<sup>レ</sup>跡<sup>ヲ</sup>に<sup>テ</sup>何<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>あり<sup>キ</sup>と<sup>ル</sup>ん<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>あり<sup>キ</sup>  
ツナ シシギ トシゴホリ トシムラ カニワラツカ シキ  
 や<sup>レ</sup>吉<sup>ノ</sup>傳<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>今<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>上<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>務<sup>メ</sup>る<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>松<sup>ノ</sup>平<sup>ノ</sup>清<sup>ノ</sup>波<sup>ノ</sup>が<sup>レ</sup>あり<sup>キ</sup>と<sup>ル</sup>ん<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>あり<sup>キ</sup>  
シヤカシヤン チカ トキ ミノ カニ ツカ カニ ツカ  
 者<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>後<sup>ノ</sup>勅<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>承<sup>レ</sup>け<sup>テ</sup>又<sup>レ</sup>田<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>あり<sup>キ</sup>と<sup>ル</sup>ん<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>あり<sup>キ</sup>  
レイチン ハムニ エ ケ ツカ コニ ツカ  
 あり<sup>キ</sup>例<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>二<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>初<sup>ノ</sup>半<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>日<sup>ノ</sup>廿<sup>ノ</sup>五<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>許<sup>ス</sup>入<sup>レ</sup>つ<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>あり<sup>キ</sup>  
イ エ カニ ツカ コニ ツカ  
 者<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>田<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>あり<sup>キ</sup>と<sup>ル</sup>ん<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>あり<sup>キ</sup>  
イ エ カニ ツカ コニ ツカ







寸九尺余

寸七寸余

貞享三<sup>丙寅</sup>歲六月十七日

正山常真庵主

薩列生縁 行年十九歳八木八郎

右根府川小似る存意の厚あり<sup>ラモ</sup>寸七寸余

一回<sup>フシボサ</sup>知<sup>ハカ</sup>琉球<sup>サツマ</sup>の臣<sup>コハソウ</sup>士<sup>シ</sup>何<sup>ニ</sup>余<sup>ハ</sup>の<sup>ニ</sup>墓<sup>ヲ</sup>あり<sup>ニ</sup>薩<sup>サツ</sup>府<sup>マ</sup>の中<sup>ニ</sup>と<sup>シ</sup>寸<sup>ハ</sup>七<sup>寸</sup>余<sup>ナリ</sup>

琉球

琉球國

文化三丙寅十二月二日

正使三度使醫後<sup>トシ</sup>嘉親雲上<sup>トシ</sup>兵承恩舒昌之墓

法名環中院靈峯養仙醫士



五十四

一<sup>エド</sup>武<sup>マ</sup>藏<sup>カ</sup>麻<sup>マ</sup>布<sup>フ</sup>揚<sup>ヨウ</sup>田<sup>テン</sup>河<sup>カ</sup>一向<sup>イコウ</sup>山<sup>サン</sup>亮<sup>リョウ</sup>院<sup>エン</sup>者<sup>シヤ</sup>構<sup>カウ</sup>也<sup>ナリ</sup> 一<sup>カ</sup>園<sup>エン</sup>山<sup>サン</sup>亮<sup>リョウ</sup>院<sup>エン</sup>亮<sup>リョウ</sup>危<sup>イ</sup>の<sup>ミ</sup>建<sup>ケン</sup>也<sup>ナリ</sup>

此<sup>コノ</sup>危<sup>イ</sup>院<sup>エン</sup>上<sup>ノ</sup>亮<sup>リョウ</sup>也<sup>ナリ</sup> 分<sup>クニ</sup>信<sup>シン</sup>也<sup>ナリ</sup> 公<sup>キミ</sup>の<sup>ノ</sup>婦<sup>メノ</sup>角<sup>ツノ</sup>井<sup>イ</sup>信<sup>シン</sup>也<sup>ナリ</sup> 順<sup>ジュン</sup>宗<sup>ソウ</sup>の<sup>ノ</sup>婦<sup>メノ</sup>也<sup>ナリ</sup> 一<sup>コノ</sup>危<sup>イ</sup>院<sup>エン</sup>上<sup>ノ</sup>亮<sup>リョウ</sup>也<sup>ナリ</sup> 分<sup>クニ</sup>信<sup>シン</sup>也<sup>ナリ</sup> 公<sup>キミ</sup>の<sup>ノ</sup>婦<sup>メノ</sup>角<sup>ツノ</sup>井<sup>イ</sup>信<sup>シン</sup>也<sup>ナリ</sup> 順<sup>ジュン</sup>宗<sup>ソウ</sup>の<sup>ノ</sup>婦<sup>メノ</sup>也<sup>ナリ</sup> 一<sup>コノ</sup>危<sup>イ</sup>院<sup>エン</sup>上<sup>ノ</sup>亮<sup>リョウ</sup>也<sup>ナリ</sup> 分<sup>クニ</sup>信<sup>シン</sup>也<sup>ナリ</sup> 公<sup>キミ</sup>の<sup>ノ</sup>婦<sup>メノ</sup>角<sup>ツノ</sup>井<sup>イ</sup>信<sup>シン</sup>也<sup>ナリ</sup> 順<sup>ジュン</sup>宗<sup>ソウ</sup>の<sup>ノ</sup>婦<sup>メノ</sup>也<sup>ナリ</sup>











ありし書画をうらなむ是も互ひに信じて居るものなり其の事あり  
マゴト ニヨク フラ ヤーラリマカ イクマ コハ バナ アンチイ  
てり毎小柄と照し良利也り其の事誠然に都をぶりて其の事あり  
シユエシ テウミカス ソク ドラクガ、 キフツ  
酒ありておひるまゝに酒は飲まざる道員也の事おひるま  
コト ヲイニウ セシキヨ サンリク ナラツノノコ ヤラセ  
その事ありて小柄は酒は飲まざる道員也の事おひるま  
ラツ ホウエウ トリメ トリカ(ヒヤカ)シユエ カラミ ナラ  
と移るもの小柄丁の切目平く其の事ありて其の事ありて  
ハヤムマ シタテ ニホンバヒ ホエフチテウ アト キテ  
あるが早馬とは今日本場中井所居りて其の事ありて其の事ありて  
ハヒ ヒシキヨ カイアゲ ナ  
おひるまの事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて  
トチカウ ヨー フチキナマス ルー キリカタ コト ニヤウ  
その事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて

タクミ フウニナラザリ コ、イシカワサケウ イシ  
おひるまの事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて  
ハキセウ ニギヤ 二トシケイシヤ 二 ハンカシ ヒキ  
その事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて  
シト イシセイタエ アイ コ、フイ トウダウ  
おひるまの事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて  
アウ モト サケテウ メイテイ シカシ イシ ニ  
おひるまの事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて  
ロガラチ コロイロ バシリ チヤバン ニ ラド ケウ アヨイナム  
おひるまの事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて  
トシ サウマ ガンテウ モノマチ アス リヨカウ ヤガ  
おひるまの事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて  
コウツウ イト ヒキセウニケウ ハテ  
おひるまの事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて  
トリキテウ アキ ヨウヤサカツキマラ フシド チニウ  
おひるまの事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて  
ヨウイ サケテウチウ チシスー セキセウガ 日 ラニカク  
おひるまの事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて















メクハセ

イトマコ

カイロ

カレカク

ヨ

目録に人眼を―吉兼の海にまゝとまゝとまゝと酒を予め

アチヤカ アシバヤ リチワカ

ノシマ

カイテウ マウ

スガ

コシヤ

小舟の―とまゝとまゝのまゝとまゝと友人の宿の宿に宿とまゝと田村の合刻

イシ

シラバウ

ニシガン

エロコ

イワツキ

セウヨウ

院の宿の―の眺を小眼を宿の―の宿に宿とまゝと田村の合刻

ガイモン

エキ

ハク

アウ

アカヤマ

ヒヤクタクシロ

マシ

ハル

ヨ

大つとまゝとまゝの宿に宿とまゝと田村の合刻

キタク

コシガヤ

ノリイダ

ヨ

カニチイ

友人の宿の―とまゝとまゝの宿に宿とまゝと田村の合刻

セシチウ

ホルテマ

カイテウ

マウ

ヒツジ

ゲコク

ヲヨ

宿の宿の―の眺を小眼を宿の―の宿に宿とまゝと田村の合刻

コギモド

タンカレ

スグ

コシガヤ

ヲハシ

キウ

ニエラウ

―とまゝとまゝの宿に宿とまゝと田村の合刻

イガ

サケミ

シラバウ

ニシガン

エロコ

イワツキ

セウヨウ

宿の宿の―の眺を小眼を宿の―の宿に宿とまゝと田村の合刻

スガ

シユエシ

セシヤトク

フサ

ムマ

コク

宿の宿の―の眺を小眼を宿の―の宿に宿とまゝと田村の合刻

ノミ

ホド

フクキウ

リン

アムイ

ツソウ

ハツ

キリヨク

スグ

ヨヤヤ

宿の宿の―の眺を小眼を宿の―の宿に宿とまゝと田村の合刻

イトマコ

ハトガヤ

エキ

ニエラウ

城を眺を―とまゝとまゝの宿に宿とまゝと田村の合刻

ガク

ヤド

―とまゝとまゝの宿に宿とまゝと田村の合刻

フチ

カン

ホイ

シエツク

ク

人眼を眺を―とまゝとまゝの宿に宿とまゝと田村の合刻

ニチコウ

ビシ

セイコウ

ニダ

フミ

ラウ

ツカマ

後者後礼の女細と宿の文の奥とまゝと田村の合刻

フシ

カナ

ガウカ

フワリウ

ヨノ

キシエウ

モノ

ニミ

ヨク

宿の宿の―の眺を小眼を宿の―の宿に宿とまゝと田村の合刻

ガ

キス

―とまゝとまゝの宿に宿とまゝと田村の合刻

サキタ

マホリ

イワツキ

ヲカ

エナセ

シノヤ

キヨセウ

ヒシエ

トウ

一武の宿の宿の―の眺を小眼を宿の―の宿に宿とまゝと田村の合刻

ニ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

五十六















一 東武清六宮内東光山石像

フカクワロクセシホリトウクウヤザンヨウシニジ

曹洞 牧神城中寺の石像ありと云

系持末地を以てありてふもすむりて後海ありんらんあり

石像ありし長六尺程ありてその成就を以て系持末地を以て傳へ

此石ありしがあちハ雪平菴英老の墓持末地を以て系持末地の碑と

表し傳へて号あり又その右に海老の墳墓と云い後世を名の朽

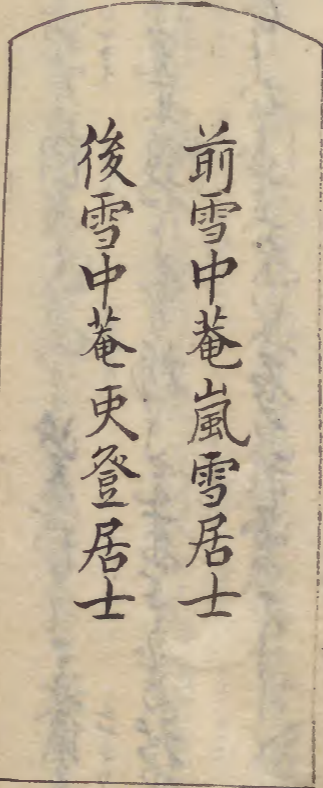
ざり奉と形ありて

志原池邊小

志原又年南岸

六月廿五日

之に所分り



前雪中菴嵐雪居士

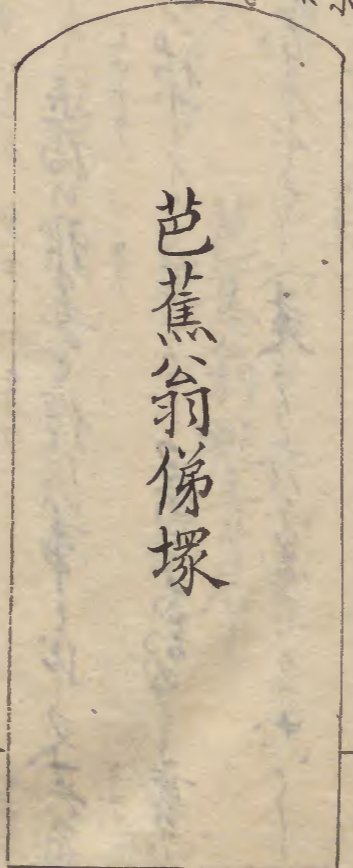
後雪中菴吏登居士

志原池邊小

志原又年南岸

六月廿五日

之に所分り

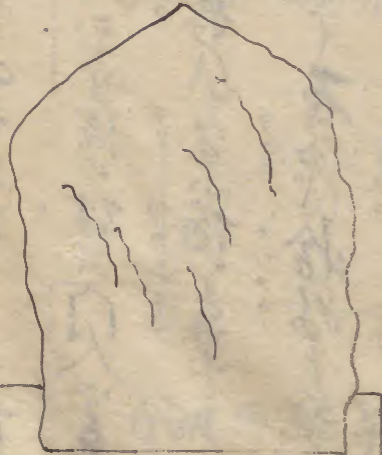


芭蕉翁傍塚

双尔屯百

也

首接心



雪上

所霜



一 在武深川東下所轄山長寺なる 小芭蕉其角乙字風を霜

後等の墓あり列して世に碑ハ一人宗真其角乙字師西の遺徳を

芭蕉とて其母を慕ひし事小堀と稱せしと云ふは其母の墓に

其角自身を記し 石を以て始好す也 宗真其角乙字師西の遺徳を

多しと云ふ今も其母の墓に芭蕉と慕ひし事小堀に例年十月十日系

某寺にて追福の雅事と信し事と云ふ又其角其母の墓に

その向の社中より建つてつるものあり 宗真其角乙字師西の遺徳を

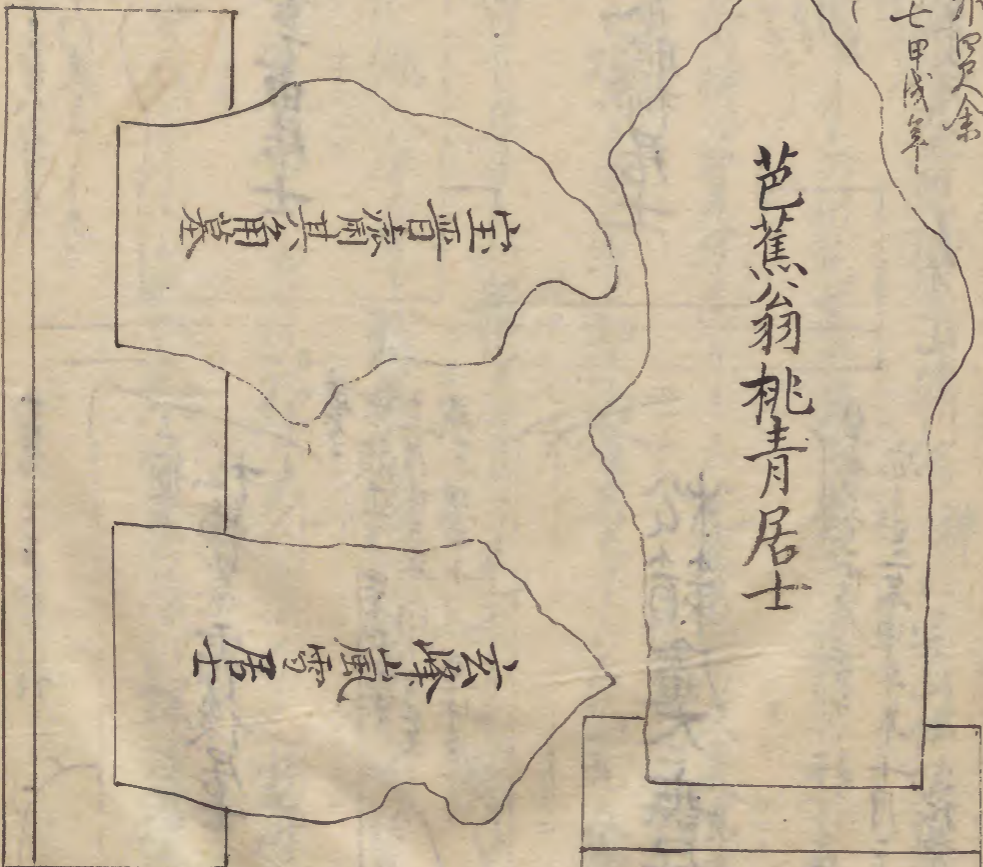
石を以て始好す也 宗真其角乙字師西の遺徳を

後より下る 武深大塚なるものあり

芭蕉翁桃青居士

宝晋齋其角墓

玄峰園其角居士



芭蕉翁桃青居士の墓に在りて其母の墓に

宗真其角乙字師西の遺徳を  
芭蕉翁桃青居士の墓に在りて其母の墓に  
宗真其角乙字師西の遺徳を  
芭蕉翁桃青居士の墓に在りて其母の墓に

宗真其角乙字師西の遺徳を  
芭蕉翁桃青居士の墓に在りて其母の墓に

十月十日

刻  
芭蕉翁桃青居士















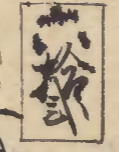
佛の遺徳を造りて...  
カニタラ ソワリク トウコク テシトク  
ホツケル エ  
イ ロク 七カ セイコウ クチ コ、シル  
ミコトスル 勅...  
イシテ...

此碑のうらの方刻して

文行待買一

以申待買

楚石切口睡



武... 天松... 日蓮... 鎌倉...  
カワシカコホリ ラシアムラ テシセウガシサノトウシ  
カマクラ セイイタイセウガシ コレヤヌミノウ シヨチ  
ミチレンフデ モウコ タイチ  
ハタマレダラ  
シ

仍... 幸巳... 武... 日蓮...  
ギ カノジキ ツタ ミノウ ガダノイシ カラシ  
カイトノミトシ タイチモウコ タイセウ アシカニハンゴ  
ソウヒキ  
ハツ  
コノハタ ツク レウメニ ミチンタイウハチタイウワシツダ  
ウツノミヤサダツト  
セシハド  
エカ ミチレン イソク タイチ ガチンリキ コリ コ、ライ  
ヲハマンダラ ケン ミンノウ ミンシユ ラホシメミスチ ウツノミヤサダツ  
ハタ アタ ハタツト タイクニ 甲 ロクシ ミンハツ サイカイ ノリイダ  
此... 武... 日蓮...  
ハタ アタ ハタツト タイクニ 甲 ロクシ ミンハツ サイカイ ノリイダ







予好言守及らるる事及し御事あり此は麻の布に似たり  
 一〇 一十一〇 一五〇 一六〇 一七〇 一八〇 一九〇



兩面之大旗来由記

弘安四年<sup>辛</sup>巳五月二十日從大元國蒙古賊船四千余艘  
 入數二十四方余責来七月於九列防戰其時這大龍王  
 之御旗圓中日蓮上人為祈禱大漫茶羅令書此御旗  
 先立向親王九列給時<sup>某</sup>為武之大將至九列則日本之靈  
 神擁護有神風吹彼賊船其人數等不殘破異國追  
 拂給日出度旗成故我家是預給畢

十一月二十日

宇津宮

貞綱判















翁名識之姓岸氏俗稱宇右衛門其父仕豊岡侯生翁于亀井街  
 之寓居翁至中年好狂歌稱頭光又號桑揚菴牛門先生以其  
 巴人亭之號與之自是門徒益進声震海内嗚呼名玉易碎室  
 菴難全寛政八年丙辰四月十二日曉病卒葬于駒籠瑞泰寺  
 後山今茲壬戌當七年之追遠翁友人尚左堂俊滿与其社中諸  
 子謀立翁之墓碑董堂井敬義為之記併書。

伯樂 尚左堂 俊滿  
 崔邊菴 佐保丸  
 不断 七持

白雀亭 羽風  
 一卷亭 長文  
 唐橋 和足  
 青陽亭 万歳


愛樹  
 露頂軒 芳貫  
 庭訓舎 綾人

一 東武海浄心ツカカリノシロシロ 日蓮ニッポ  
カカ 雲霧の南流レイカ 石の表トナ 入印塔トナ  
カカ 東の山トナ 所トナ 高トナ の墓トナ 系トナ 小トナ 石トナ

六



多原能俊の徒の坊舎新造の事多かりし事小原保の末の六代  
 男之孫不名をり相模行司の居人上り事多かりし事本村名助の墳  
 墓ありし事多かりし事

宝曆五乙亥年  
 妙法 速悟勇心信士  
 十月二十六日  
 木村  
  
 庄之助

件の事之の右孫信士速悟勇心信士の事多かりし事本村名助の墳  
 墓ありし事多かりし事

一 在藏の首人曹溪の事多かりし事  
 朱子後派の墓ありし事多かりし事  
 助元寺の事多かりし事  
 一 代の事多かりし事

勢多の事多かりし事

寛政十戊午年  
 運光院 恭安道父居士  
 十二月十二日  
 寥照院 孤月貞參大姉











一 東武堂第一番七面大明神の坂下音の昔の例小

とて小祠ありては昔は音人の掃りて大伴耕地ありては

此の田の武吉中をきりて一帯をいりて女何もの密をきん

懐胎の月を或は此をきりて切殺さぬとては音の代受

たせらる何年計ふかきりて音の事夜ありては音人

相傳て七面大明神とありて今日七月廿六日あり年号ハ

そのひは儀もは音の事ありて同日ありては音の事あり

音の事夜漏流りては音の事ありては音の事あり

燃る者も今ありては音の事ありては音の事あり

ヤナカサンサキシチノ

センダキ

ツゲバシ

ガク

チ

ホコラ

ワウゴ コノヘロ ジンカマ

タイライ カラテ

セツ

ツトメ

ミツツク

クイタイ

フルヨ エノトコロ

キリコロ

エメ

マシラ

ナニトゾ カミ マリ

カヒ

ドシロ

アキギ

ノイニナ

チシコウ

コサギ

ゴベキキヨ

ワタ

エニ エキレイ ハヤリ

ウチクモ

ハニ

カギ

ウツラ

マツカ

シユゴ

サイレイ ミソメ

マイニシノケリ レイター

トナ

祭礼は初より毎年右側小祠をハありて七面大明神の

あり音の老人のわらわら音の事ありては音の事あり

七

一 東武堂第一番七面大明神の坂下音の昔の例小

とて小祠ありては昔は音人の掃りて大伴耕地ありては

此の田の武吉中をきりて一帯をいりて女何もの密をきん

懐胎の月を或は此をきりて切殺さぬとては音の代受

たせらる何年計ふかきりて音の事夜ありては音人

相傳て七面大明神とありて今日七月廿六日あり年号ハ

そのひは儀もは音の事ありて同日ありては音の事あり

音の事夜漏流りては音の事ありては音の事あり

燃る者も今ありては音の事ありては音の事あり

七

一 東武堂第一番七面大明神の坂下音の昔の例小

とて小祠ありては昔は音人の掃りて大伴耕地ありては

此の田の武吉中をきりて一帯をいりて女何もの密をきん

懐胎の月を或は此をきりて切殺さぬとては音の代受

たせらる何年計ふかきりて音の事夜ありては音人

相傳て七面大明神とありて今日七月廿六日あり年号ハ

そのひは儀もは音の事ありて同日ありては音の事あり

音の事夜漏流りては音の事ありては音の事あり

燃る者も今ありては音の事ありては音の事あり











元禄十六癸未年

大石内藏助良雄

忠誠院及空淨劔居士

二月四日

行年四十五歳

吉田忠左衛門兼亮

又忠光劔信士

行年六十三歳

右の如く大石氏の院号ありて残り居給ふ人の茂宗院号あり又  
カイヤシ ヨシヲ  
 基石も右の如くありて残り居給ふ人の茂宗院号あり又  
チー  
 雄一は右の如くありて残り居給ふ人の茂宗院号あり又  
トリマキ  
 又その外は右の如くありて残り居給ふ人の茂宗院号あり又  
ツリヤク  
 又その外は右の如くありて残り居給ふ人の茂宗院号あり又  
シル  
 又その外は右の如くありて残り居給ふ人の茂宗院号あり又

又峰毛劔信士

俗名原物右衛門元辰

五十六歳

又勘要劔信士

同片岡源五右衛門亮房

三十七歳

又誉道劔信士

同間瀬久大夫正明

六十二歳

又頂串劔信士

同小野寺重内秀知

六十一歳

又泉如劔信士

同間喜兵衛充延

六十九歳

又求周劔信士

同磯谷十郎左衛門正久

二十五歳

又毛知劔信士

同堀部彌兵衛全九

七十七歳

又隨落劔信士

同近松勲六行重

三十四歳

又勇相劔信士

同富森助右衛門正因

三十四歳



又寛住劔信士 同大石瀬左衛門信清 二十六歳

又法参劔信士 同矢田五郎右衛門助武 二十九歳

又峰周劔信士 同奥田孫大夫重盛 五十七歳

又廣忠劔信士 同赤垣源藏重賢 三十九歳

又破弓劔信士 同早水勝右衛門清亮 四十歳

又烟空劔信士 同潮田又之丞高教 三十五歳

右の拾七人ハ仇討の後細川成中より出陣せり元禄十六年二月

月冒我陣中定々我陣の邊に目切候侍りしもの多し其時其時

及び今後人稱傳等の名を以て其時其時

又神拂劔信士 同田島八十右衛門常樹 二十八歳

又當掛劔信士 同吉田沢右衛門兼貞 二十九歳

又惟春劔信士 同武林唯七隆重 三十二歳

又煉鍛劔信士 同倉橋傳助武幸 三十四歳

又摸唯劔信士 同間新六郎元風 二十四歳

又有梅劔信士 同村松喜兵衛秀正 六十二歳

又可仁劔信士 同牧野重平次治房 二十八歳

又童霞劔信士 同勝田新右衛門武亮 二十八歳

又風汎劔信士 同小野寺幸右衛門季昌 二十八歳



又補天劔信士

同前原伊助宗房

四十一歳

モラリノイノカミ マニアツ  
子イトラーセツク シサイトラ  
以拾人先打甲斐守之四代若自日影の色切後の子細考よりいふ如

又上樹劔信士

同大石主税良金

拾六歳

又雲輝劔信士

同堀部安兵衛武庸

三十四歳

又露白劔信士

同中村勘助正良

四十九歳

又氷流劔信士

同菅谷半之丞政利

四十四歳

又觀祖劔信士

同不破數右衛門正種

三十四歳

又道直劔信士

同千馬三郎兵衛光忠

五十一歳

又道普劔信士

同木村罔右衛門貞行

三十四歳

又回逸劔信士

同罔野金右衛門包秀

二十四歳

又電石劔信士

同貝賀彌左衛門友信

五十一歳

又無一劔信士

同大高原吾忠雄

三十二歳

以孫火八松平隠岐守之四代若自日影の色切後の子細考よりいふ如

又利效劔信士

同神崎与五郎則休

三十八歳

又珊瑚劔信士

同三村次郎左衛門包常

三十七歳

又當水劔信士

同横川勘平宗則

三十三歳

又郷城劔信士

同芦野和助常助

三十三歳

又大及劔信士

同間瀬孫九郎正辰

三十三歳







ホシジヨカテカウスゲ ヨカ ミキリソウアケ ツミ クラ  
おん世に心助小一 初原の物 蘇我持のトウボウニおと挿入一花  
あふーと目ハ出石花の中 小妖怪の伝事あきバ 夜ハ勿福をよ  
ツレガチエキ ヨロツ  
あふへで連なりし 小妖怪のトウボウニおと挿入一花  
コマツ タキ ツウキ キガシ ツウ クラ  
小鳥と遊 夜ハ初原の物 蘇我持のトウボウニおと挿入一花  
カメライ ノチドバケ シサイ ヨウクワイ  
くわい 小妖怪の伝事あきバ 夜ハ勿福をよ  
サテマタ ツウキ コテ モシモノ サガ  
ありと物ハあふ月の夜 蘇我持のトウボウニおと挿入一花  
カナラズ ヨウクワイ カタチコレ  
あきバ必 小妖怪の伝事あきバ 夜ハ勿福をよ  
セシヨコバウス コメクラ ラダルマ ミツク イスハリコ カゴ キジヨ メンダ  
小鳥と遊 小妖怪の伝事あきバ 夜ハ勿福をよ  
ゼニウケイナシギワバ ルー シエー (ニシ)  
一 女ハ初原の物 蘇我持のトウボウニおと挿入一花

クレ ツウキ キミ トビ モシマタ キンヘン  
惟その夜 蘇我持のトウボウニおと挿入一花  
カササキ マカサ ヨ カナホウ アルク フー  
火をわんた方ハ 惟その夜 蘇我持のトウボウニおと挿入一花  
カナイクラサイ シヨトウク カタウケ  
てあきバ 蘇我持のトウボウニおと挿入一花  
ハタ フリーヨ ソウアヒ イタク ノガ  
るに果 一 小妖怪の伝事あきバ 夜ハ勿福をよ  
スタビ ステ サリ クラシエー ナギン ナイナイ シチミナ  
夜ハ初原の物 蘇我持のトウボウニおと挿入一花  
シマイ ミキリソウアケ テハア トリウ  
仕立 一 小妖怪の伝事あきバ 夜ハ勿福をよ  
アヒカラ ミエツクワ カセマカハスガバゲ エミ ヤナヒロ  
まふと 折柄出たあき 小妖怪の伝事あきバ 夜ハ勿福をよ  
ヨウヤ カゴ イガ  
夜ハ初原の物 蘇我持のトウボウニおと挿入一花  
カテノキ ロナイ ミシセツ ハコ トウダグ イシクラ  
夜の方 一 小妖怪の伝事あきバ 夜ハ勿福をよ



中<sup>ツメ</sup>宿<sup>イト</sup>入<sup>トコ</sup>へ<sup>ヘ</sup>飛<sup>キ</sup>す<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ぶ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>木<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ス<sup>カ</sup>ワ<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>湯<sup>カ</sup>薦<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>魚<sup>カ</sup>  
ん<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>ゆ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ぶ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>木<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ス<sup>カ</sup>ワ<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>湯<sup>カ</sup>薦<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>魚<sup>カ</sup>  
カノイシケラ

三人の女<sup>カニ</sup>懸<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>推<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>甲<sup>カ</sup>斐<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>ち<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>口<sup>カ</sup>  
ツミヤキ トソツ

横<sup>カ</sup>切<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>月<sup>カ</sup>抱<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>連<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>合<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>連<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>合<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>  
イノコ ハシタ フシギ

居<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>身<sup>カ</sup>女<sup>カ</sup>不<sup>カ</sup>思<sup>カ</sup>夜<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>浮<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>件<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>女<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>私<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>後<sup>カ</sup>更<sup>カ</sup>  
マラ フラキコテラ

は<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>推<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>言<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>老<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>省<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>不<sup>カ</sup>  
ツタ キク ヨウク

星<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>光<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>信<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>妖<sup>カ</sup>怪<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>思<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>ツ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>身<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>  
ハンタ ハンジ

ま<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>女<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>身<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>連<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>合<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>連<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>合<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>  
ハコ シメ

運<sup>カ</sup>び<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>口<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>焼<sup>カ</sup>  
ツタ キク ヨウク

と<sup>カ</sup>道<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>妖<sup>カ</sup>怪<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>思<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>ツ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>身<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>  
ノガ ヨウク

お<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>口<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>焼<sup>カ</sup>  
モツ マラセ

物<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>体<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>焼<sup>カ</sup>  
ズシ

て<sup>カ</sup>佛<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>焼<sup>カ</sup>  
カク

彼<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>口<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>焼<sup>カ</sup>  
ヒガヒ

火<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>口<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>焼<sup>カ</sup>  
ダン

彼<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>口<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>焼<sup>カ</sup>  
カ



























何喰まゝに任成りけるやあ

山

一 東武山ノ麓に古蹟ありて昔の清水谷所ノ南極所坂ノ下はあり

セバク

ケイタイ

フダ

セバク

ケイタイ

フダ

ガジモ

ケイタイ

フダ

申

ケイタイ

フダ

一 東武山ノ麓に古蹟ありて昔の清水谷所ノ南極所坂ノ下はあり

セバク

ケイタイ

フダ

ガジモ

ケイタイ

フダ

申

ケイタイ

フダ

一 東武山ノ麓に古蹟ありて昔の清水谷所ノ南極所坂ノ下はあり

セバク

ケイタイ

フダ

ガジモ

ケイタイ

フダ

申

ケイタイ

フダ

一 東武山ノ麓に古蹟ありて昔の清水谷所ノ南極所坂ノ下はあり

セバク

ケイタイ

フダ

ガジモ

ケイタイ

フダ

申

ケイタイ

フダ

一 東武山ノ麓に古蹟ありて昔の清水谷所ノ南極所坂ノ下はあり

セバク

ケイタイ

フダ

ガジモ

ケイタイ

フダ

申

ケイタイ

フダ

一 東武山ノ麓に古蹟ありて昔の清水谷所ノ南極所坂ノ下はあり

セバク

ケイタイ

フダ

ガジモ

ケイタイ

フダ

申

ケイタイ

フダ

一 東武山ノ麓に古蹟ありて昔の清水谷所ノ南極所坂ノ下はあり

セバク

ケイタイ

フダ

ガジモ

ケイタイ

フダ

申

ケイタイ

フダ

一 東武山ノ麓に古蹟ありて昔の清水谷所ノ南極所坂ノ下はあり

セバク

ケイタイ

フダ

ガジモ

ケイタイ

フダ

申

ケイタイ

フダ



常のりふふまきりむらに物をも遠く中へ毎本生えりて

かの取代たあきり毎々雄竹の類い言さるる余ありむり家

然るの類ともあつらん日高候内へ精老身義の流流ふ

そのありとふ人あり合々慮候の事ささるる人共あつらん

一 派を筆するものいふに在りし事ごとくは様態と揚り

一 東武湯字の馬車町に盛満院と云ふ寺ありて其の東に湯

園山坊と云ふ銀智院ありて南に寺ありて極ちと云ふむ

候内へ木の本極ありてその初之今極の樹ありて

門の極ちと云ふ類と揚り世人号と云ふて極ちと云ふ候内へ

ナラコ  
チユゲ  
イゴ  
ツヨ  
アルトキヤマフシ  
コソセ

一 井古川の原よりありて其の傍に園山坊ありて或付山伏人忽ち

入りて其の極ちと云ふ候内へ其の傍に湯ありて其の傍に湯

と云ふ候内へ其の傍に湯ありて其の傍に湯ありて其の傍に湯

と云ふ候内へ其の傍に湯ありて其の傍に湯ありて其の傍に湯

と云ふ候内へ其の傍に湯ありて其の傍に湯ありて其の傍に湯

と云ふ候内へ其の傍に湯ありて其の傍に湯ありて其の傍に湯

と云ふ候内へ其の傍に湯ありて其の傍に湯ありて其の傍に湯

と云ふ候内へ其の傍に湯ありて其の傍に湯ありて其の傍に湯

ナラコ

一 東武湯字の馬車町に盛満院と云ふ寺ありて其の東に湯



















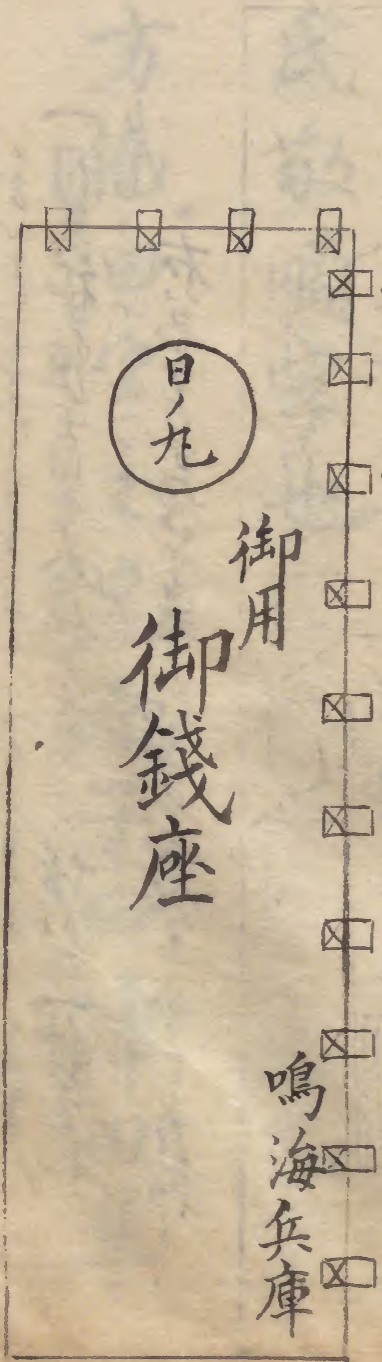
シタ、フキ、ニセキ、フイ、ハ、ワ、イトミガト、セウチク、バイ  
 徳をいふ、流を流す、下、松竹梅と徳  
 ナカ、イ、シキ、ミツク、ワ、コト、サ、ア、イ、シ  
 め、中彩文の客、古、依、つ、た、あ、方、り、各、あ、た  
 ツ、

御紋

君代と松竹梅  
 あまのりあり  
 いくまの  
 家

フシタカノ、フシスミツキ、ロイロ、カ、シ、セ、モ、シ、ジ、イ、カ、タ  
 一、市、野、所、の、山、野、子、を、野、麻、文、の、相、下、イ、カ、イ、ラ、ン、ク、シ、マ、オ、シ、タ、ウ、バ、ウ、テ、シ、カ、イ  
 ク、ロ、シ、エ、イ、シ、シ、セ、ン、イ、カ、イ、ラ、ン、ク、シ、マ、オ、シ、タ、ウ、バ、ウ、テ、シ、カ、イ  
 一、宮、家、の、新、織、と、縁、事、ハ、大、敵、号、害、の、山、野、と、南、光、坊、天、海

ハシ、タ、シ、ゴ、レ、ゼ、ラ、ガ、ラ、ガ、キ、シ、リ、ヨ、カ、ナ、シ、セ、シ、モ、シ、ジ、イ、カ、タ  
 判、決、す、る、ま、ま、一、條、山、野、を、山、野、の、新、織、の、文、字、に、縁、事、を、  
 マ、カ、ヨ、ツ、カ、シ、エ、イ、ツ、ウ、ハ、ウ、シ、エ、キ  
 天、海、山、野、を、あ、い、し、つ、て、宮、家、の、文、字、に、同、人、の、縁、事、を、  
 セ、ツ、ゼ、ニ、ガ、ラ、ガ、キ、ナ、ル、ミ、ハ、ウ、ガ、マ、モ、ツ、ナ、コ、シ、  
 山、野、の、文、字、を、海、海、音、庫、小、傳、す、る、天、海、山、野、の、  
 タ、ク、チ、ナ、シ、エ、シ、ン、キ、ウ、ダ、イ、セ、シ、ガ、ラ、ン、ホ、リ、タ、タ、ト、ウ、モ、メ、  
 山、野、山、野、の、山、野、の、山、野、の、山、野、の、山、野、の、山、野、の、  
 シ、ロ、ゲ、シ、エ、ソ、メ、ス、キ、ク、ロ、ハ、ハ  
 の、山、野、の、山、野、の、山、野、の、山、野、の、山、野、の、山、野、の、  
 フ、ヨ、ソ、ゴ、ト  
 凡、そ、夫、余、も、あ、ま、く、た、の、あ、ま、









人正其子信賢入三河奉法寺  
為寺主教映上人弟子更名賢  
順彌廓然寺其後世嗣廓然寺  
為奉法寺子院奉法寺之後江  
戶亦隨而從自賢順至師八世

親子相嗣可謂華胄矣師之為  
人淡然無嗜惟酷好茶事精其  
法律從游甚衆師與之交亦泊  
然莫逆惟酷重長德愈久而愈  
篤可謂愛衆親仁矣文化八年



師年五十一嗣寺於其子大惠  
老於一室于花于月出遊為事  
而每出遊擔骨董袋貯紙筆及  
茶具或一宿或再宿從浪於武  
總之間於是乎都下勝槩古迹

與諸侯大夫名園外至絕谷叢  
祠寒墟破塚荒林廢寺斷崖古  
城無所不到必求金石之文  
問鄉曲之老窮其珍竒神怪高  
古幽勝記之以歸至今歲十二



年其所記成前後二編六卷名  
曰遊歷雜記是歲七月後編三  
卷繕寫成以示余之已讀之則  
若與師同弄林泉酌茶吟詩涼  
氣自生清風自至使吾頓忘秋

暑之煩可謂能記矣然其序皆  
不之載亦可謂缺典矣余雖無  
德而師之舊交者也然則不可  
以不序之於後也八月二日中

水仁靜述









